

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第 21 号

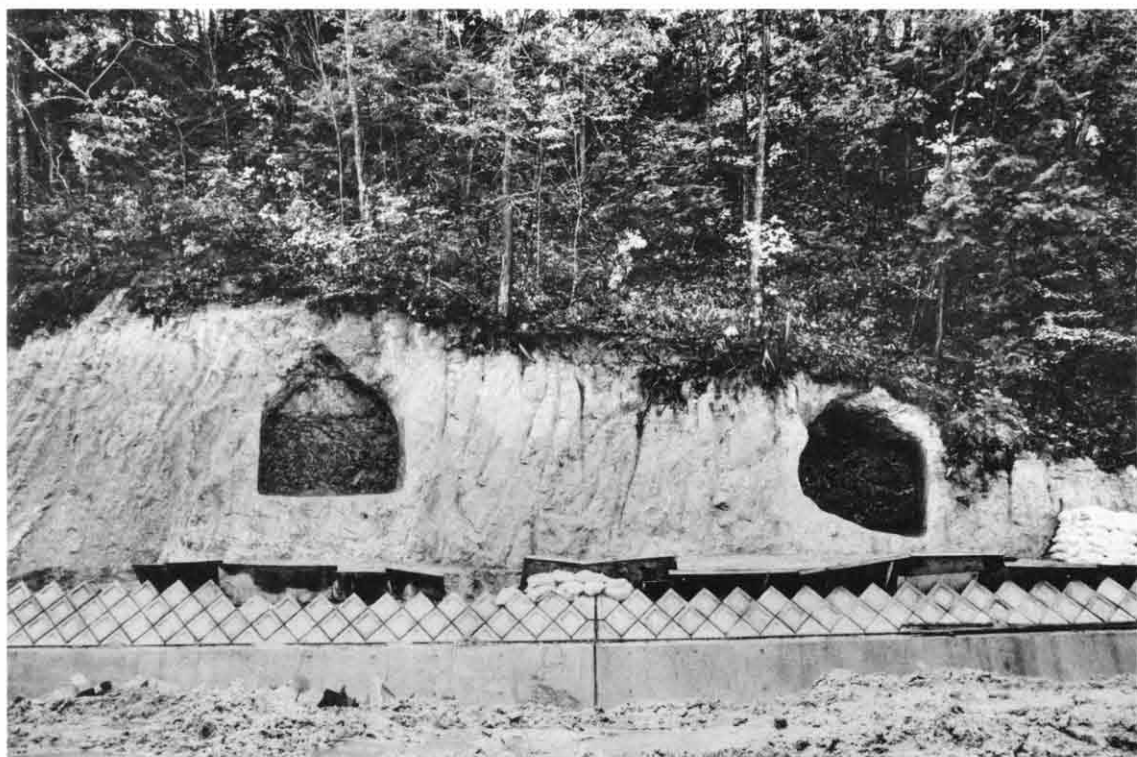
宮谷横穴状遺構について……………	安田 章…………	1
青谷石神古墳群について……………	梶本 敏三…………	7
有明古墳群・横穴群について……………	増田 孝彦…………	14
石原畑窯跡出土のヘラ描き文字・文様の須恵器について……………	石井 清司…………	20
——昭和61年度発掘調査略報——……………		36
1. 正 垣 遺 跡	4. 宮ノ森古墳群	
2. 谷 内 遺 跡	5. 篠・掛ヶ谷窯跡	
3. 長岡宮跡第172次		
資料紹介 石本遺跡出土の渦巻文のある弥生土器について……………	田代 弘…………	45
府下遺跡紹介 33. 聖塚古墳・菖蒲塚古墳……………		48
長岡京跡調査だより……………		50
センターの動向……………		55
受贈図書一覧……………		57

1986年9月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



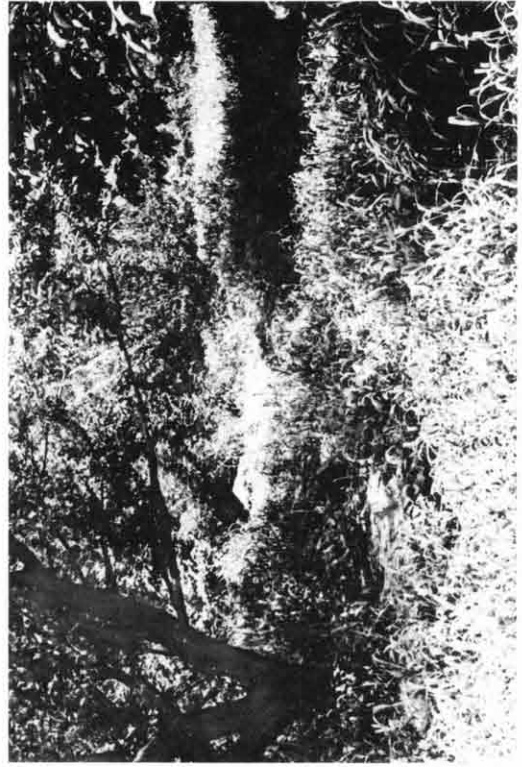
(1) 宮谷横穴状遺構遠景



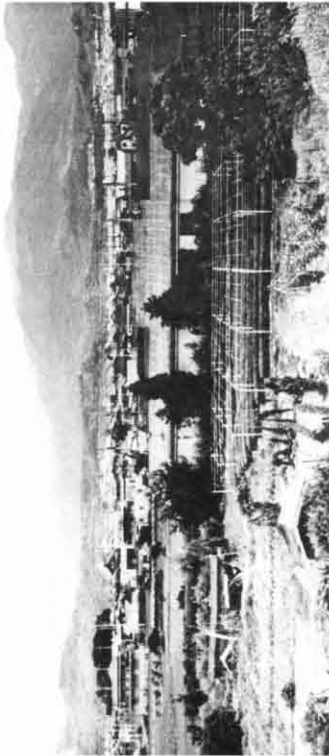
(2) 宮谷横穴状遺構



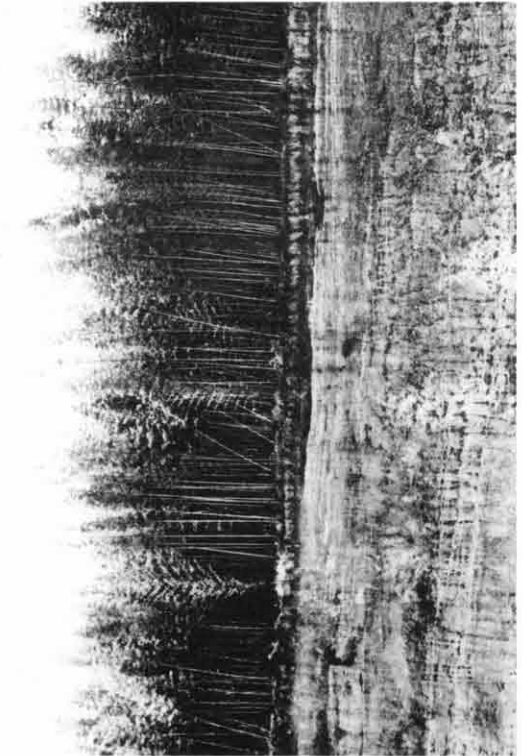
(3) 石神1号墳 石室露出状況



(4) 石神4号墳



(1) 石神古墳群遠景 (木津川堤防より)



(2) 石神1号墳 (断面に葦がみられる)

# 宮谷横穴状遺構について

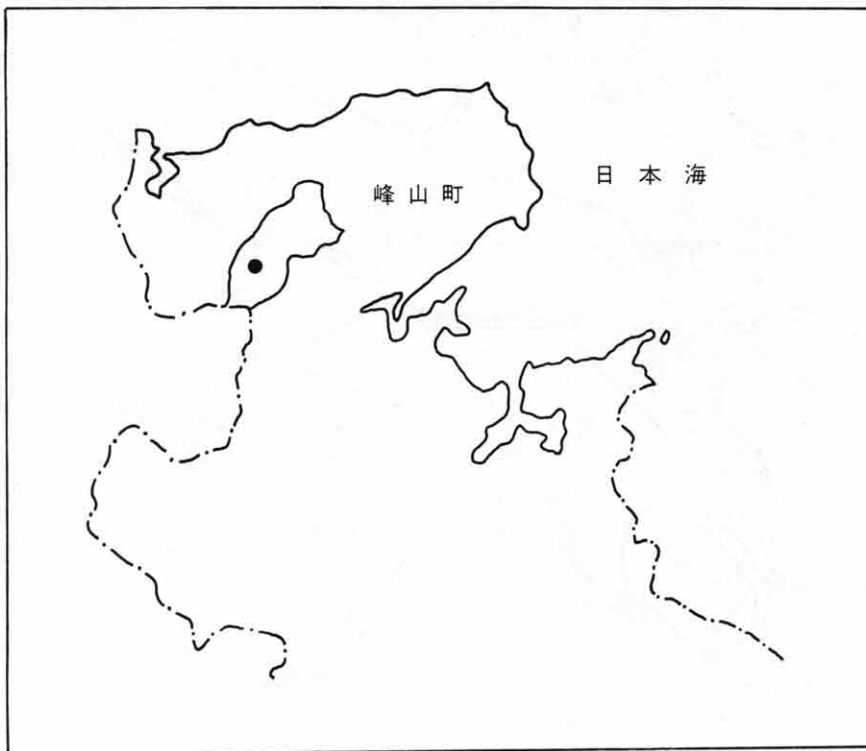
安 田 章

## 1. はじめに

京都府中郡峰山町字久次の宮谷川は、昭和58年度頃から改修工事が行われているが、60年度施工の際、丘陵斜面の掘削個所に横穴が2か所発見された。以下、この横穴について紹介することにした。

## 2. 位置と環境

宮谷横穴状遺構は、峰山町の中心から南西約5km、久次岳(標高541m)東麓の久次地区にある。北西から久次集落の中心へ延びる標高88mの丘陵先端の北斜面中腹に位置している。この地区内には、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡である宮谷遺跡、円



第1図 調査地位置図



墳1基，横穴式石室3基，中世城跡1か所が周知されているだけであつた。しかし，昭和59年秋，宮谷遺跡に隣接する宮谷川，異井谷川の改修工事現場より多数の弥生土器片，土師器片，須恵器片の外に縄文時代後期の磨消縄文土器片1点が採集された。<sup>(註1)</sup> 峰山町内で縄文土器が発見されたのは，途中ヶ丘遺跡のだ円押型文土器片（縄文時代早期）に続き2点



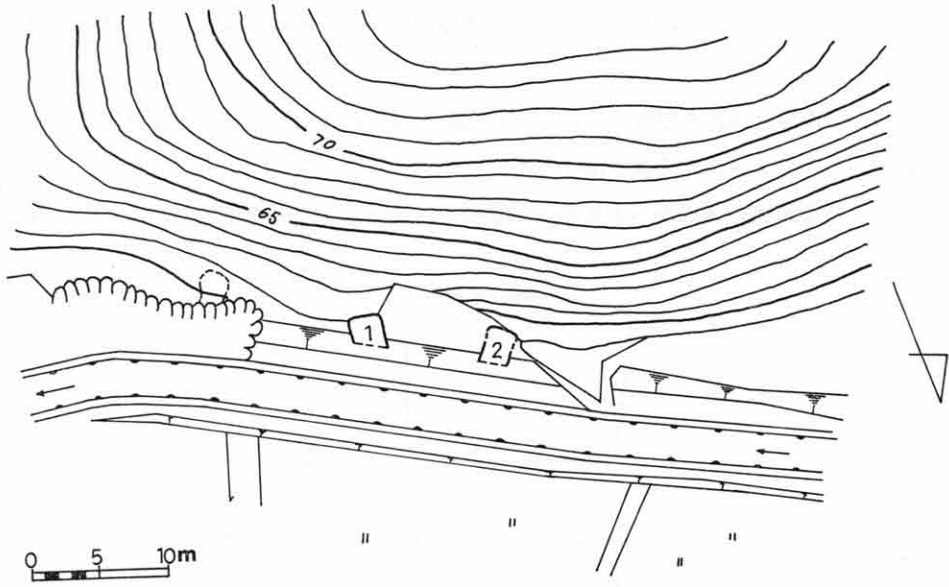
第2図 久次地区遺跡分布図

1. 宮谷遺跡 2. 宮谷横穴状遺構 3. 久次城跡  
4・5・6. 横穴式石室 7. 遺物散布地

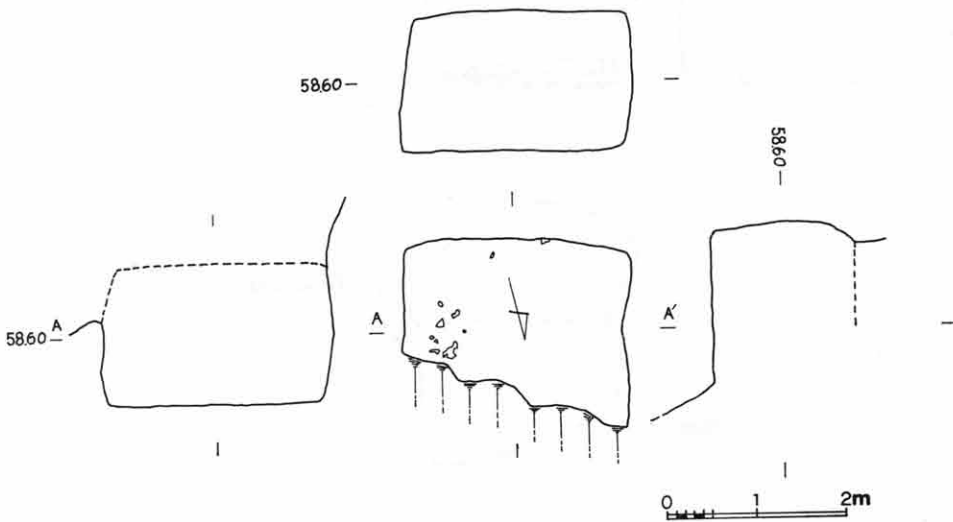
目である。また、昭和58年から行われているほ場整備により土師器、須恵器などの散布地が現在までに2か所発見されている。

### 3. 調査概要

横穴状遺構は、掘削工事により一部破壊されていたが、高さ5～7mの面に2か所確認



第3図 周辺地形図



第4図 1号実測図

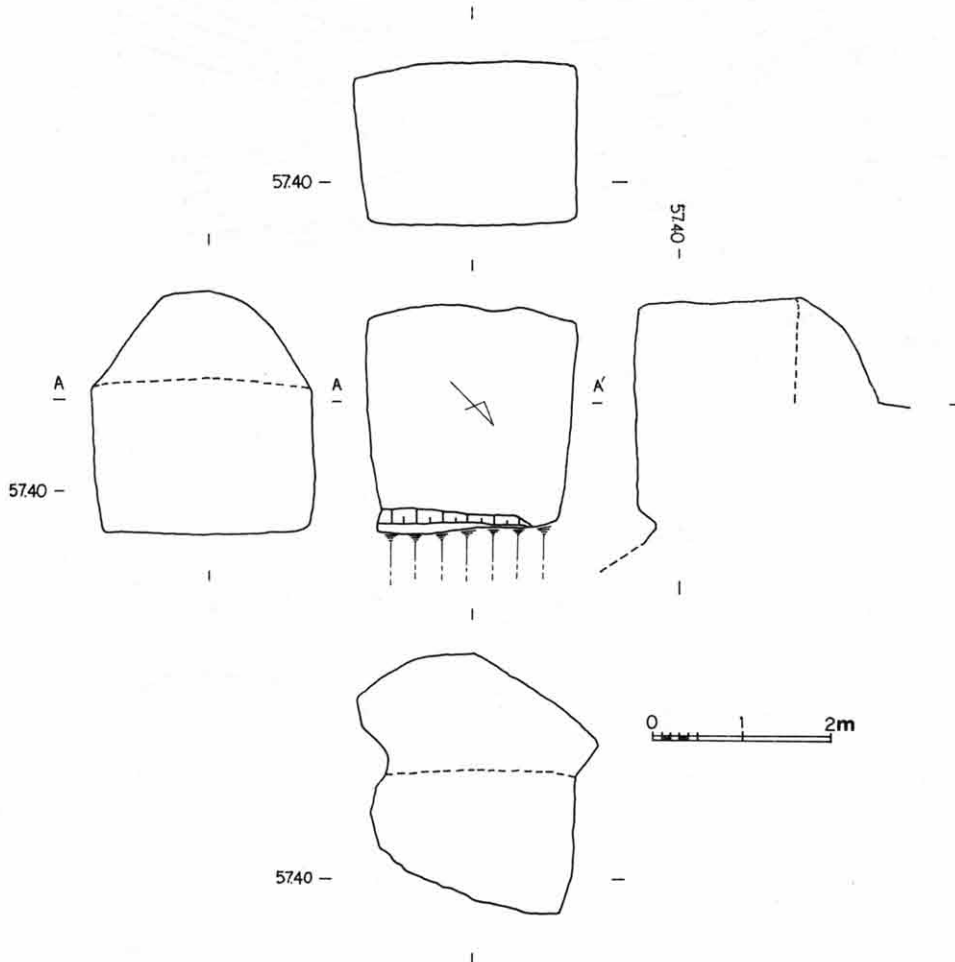
された。傾斜の急な北斜面の花コウ岩の風化した地山を掘り込んで作られており、全体に暗茶褐色砂質土が堆積していた。下流側を1号，上流側を2号とする。

(1) 1号横穴状遺構

掘削により残存するのは玄室の一部だけである。天井は既に一部崩落しており、埋土排出の際、地山の亀裂により全体に落下した。残存長さは、主軸で1.65m・幅2.49m。平面プランは、ほぼ方形をなす。主軸はN-14°-Eであり、床面は平坦で、両壁はほぼ垂直、奥壁はやや内湾して天井部に達する。天井の形状は、奥壁の痕跡からほぼ水平、高さ1.60mと推定される。

埋土は、暗茶褐色砂質土であり、下部の20~25cmは地山と同じ明黄褐色砂質土であった。この層の上面より3か所から炭が出土した。

遺物は中央部東側の床面から土師器の細片多数、奥壁部分で人骨と思われるもの2点が



第5図 2号実測図

検出された。細片は、皿のものであり散乱状態であった。また、須恵器の細片1点を南東隅で床面より約25cm上の埋土中より採取した。

### (2) 2号横穴状遺構

天井北側部分が掘削により破壊されていたが、玄室床面、前壁の一部が残存していた。天井は中央部が崩落していた。玄室は長さ2.30m・幅2.00~2.33m、主軸はN-44°-Eである。平面プランは奥壁に向かってやや広がる台形をなし、床面は平坦である。両壁及び奥壁はほぼ垂直であり、天井は南西隅に残存する部分から、水平で高さ1.70mと推定される。玄門部分に最大高0.75mの壁状のものが残存しており壁の玄室側は垂直に立ち上がる。

埋土は、暗茶褐色砂質土の下に天井落下の明黄褐色砂質土が堆積していた。

遺物は、中央部東側の暗茶褐色砂質土より土器片1点が出土したのみであった。床面より約50cm上であった。

### (3) 遺物

今回、採取した遺物は、土器片が主で外に人骨と思われるもの2点であった。

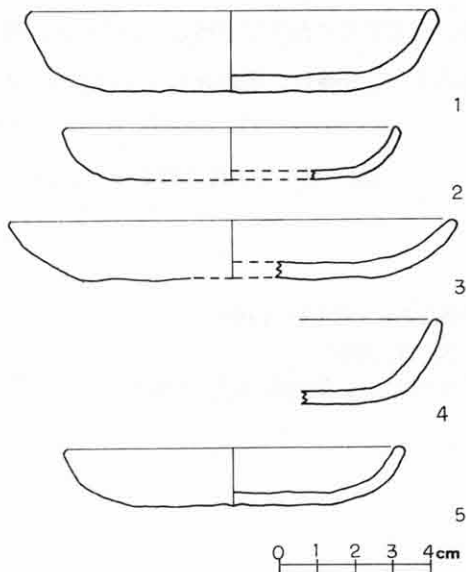
1号から出土した土師器皿は5個体分である。いずれも手づくね成形であり、口縁部のひずみが大きく器肉も一定していない。胎土は精良で、石英粒を含む。淡黄褐色を呈し、硬質である。いずれも内面をナデで仕上げしており、外面は不調整である。ナデの方向は一定しておらず、全体に粗雑である。第6図の2では口縁部の器肉の薄い部分に底部から粘土をかき上げ補強を行っている。1・2・3には内面にススが付着しており、灯明皿として

使用されたとと思われるが、灯心油痕は確認できなかった。

須恵器片は2.5×2.8cm・厚さ1.3cmで器種等不明。外面に灰釉が認められる。

2号より出土した土器片は3.5×6.0cm・厚さ0.9cmで淡黄褐色を呈し、胎土には1~3mmの石英・長石を多量に含む。摩耗が激しく詳細不明。1号の須恵器片と共に、出土状況から本遺構と直接関係なく、天井部分の落下等により玄室の堆積が進んだ後に持ち込まれたものである。

人骨片と思われるものは、パラフィンにて取り上げたが、腐敗がひどく分析不



第6図 遺物 実測図

可能であった。

#### 4. おわりに

当初「横穴墓」かと考えたが、7～8世紀の古墳としての横穴とは形状、遺物など異なることが判明した。このため、「横穴墓」と区別する必要性から本遺構を「横穴状遺構」とすることが妥当である。

今回は、二基確認したが、付近の踏査の結果、1号の下流約11mに近年まで倉庫として使用されていた横穴が1基確認された。規模は1・2号と同程度であり、もともと横穴状遺構であったものを後世に利用したものとする。

遺構の年代と性格については、決定的資料を得ることはできなかった。しかし、その形状や遺物から鎌倉市周辺に多く存在する「やぐら」<sup>(注2)</sup>、石川県志賀町の矢駄横穴状遺構<sup>(注3)</sup>などと同様に鎌倉時代後半から室町時代にかけての中世墳墓の一種と考えられる。「やぐら」は納骨の場所として、また供養の場所として使用されており、玄室内に五輪塔や納骨用の容器や小穴を設けているが、本遺構でそれらは認められない。遺構近くの河川工事現場内より、室町時代のもので推定される小型の一石五輪塔1基が出土した。遺構との関係が考えられるが推測の域を出ないものである。

2号には入口部分に前壁が残存していたが、もともと「壁」として玄室と羨道を区別していたものか、玄室が羨道より低く作られていたのか疑問点が残る。

丹後地方において、中世の横穴状遺構が確認されたのは初めてである。同様な遺構は他にも存在すると思われるが、その多くは丘陵中腹からすそにかけて立地しているため、道路や河川工事などによって偶然発見されることが多い。今後は、遺跡分布調査や工事に際して充分注意していく必要がある。

(安田 章＝峰山町教育委員会主事)

#### 参 考

注1 安田 章「峰山町宮谷遺跡について」(『太邇波考古』第6号 1985)

注2 赤星直忠「石造墳墓と矢倉」(『日本の考古学』Ⅶ 1967)

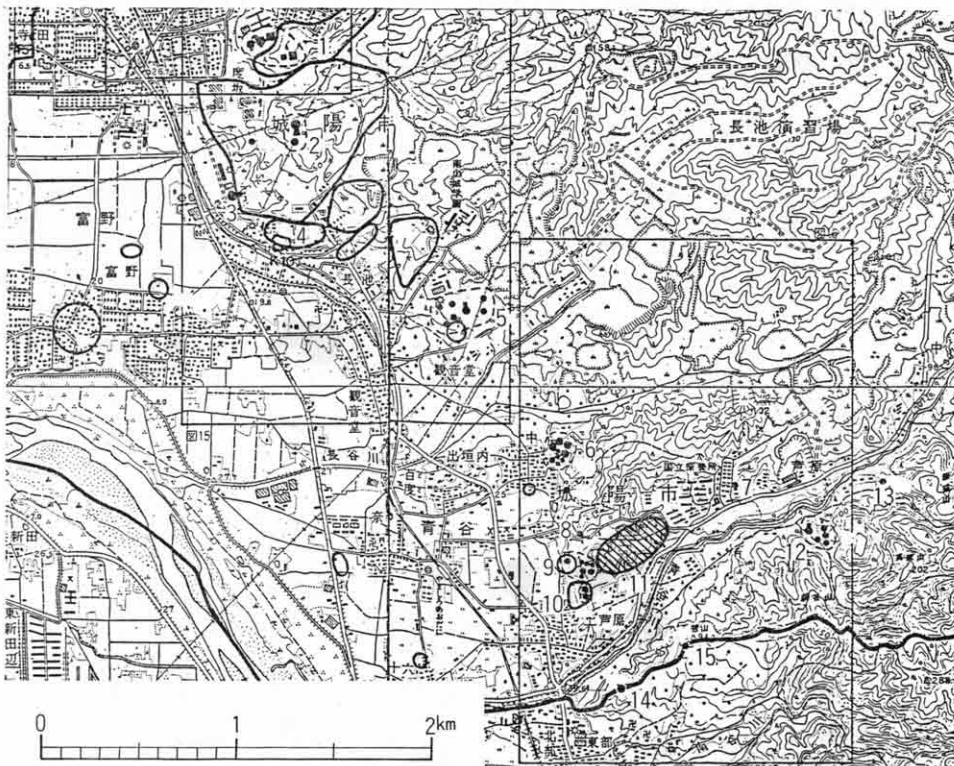
注3 石川県志賀町「志賀町の考古資料」(『石川県志賀町史』資料編第1巻 1974)

# 青谷石神古墳群について

梶 本 敏 三

## 1. はじめに

城陽市内には百基余りの古墳が確認されている。その6割は市北東部に位置する久津川古墳群で、他は市南部の長池より青谷の間に点在している。久津川古墳群は確認調査が数多く行われており、各遺跡の実態が明らかにされつつあるが、市南部の調査はほとんどなく、そのため各遺跡についての詳細がわかっていないのが現状である。しかし、青山古墳群のような状態で発見されることを避けるため、市内の文化財保護団体・文化財保護指導委員が巡視を行っていた。



第1図 石神古墳群位置図

- |           |           |           |             |
|-----------|-----------|-----------|-------------|
| 1. 宮ノ平古墳群 | 2. 梅の子塚古墳 | 3. 長池古墳   | 4. 森山遺跡(史跡) |
| 5. 青山古墳群  | 6. 黒土古墳群  | 7. 青谷古墳   | 8. 北石神古墳    |
| 9. 天満宮古墳群 | 10. 城山古墳群 | 11. 石神古墳群 | 12. 丸山古墳群   |
| 13. 松尾古墳  | 14. 茶臼塚古墳 | 15. 上戸塚古墳 |             |



昭和60年9月頃より国立南京都病院西側台地で砂利の採掘がはじめられた。当地は京都府遺跡地図には記入のない所であったが、採掘地断面に石室の露出を発見し、また須恵器杯身破片の出土により古墳であることを確定した。以後、西方同丘陵上を踏査し、6か所を確認した。

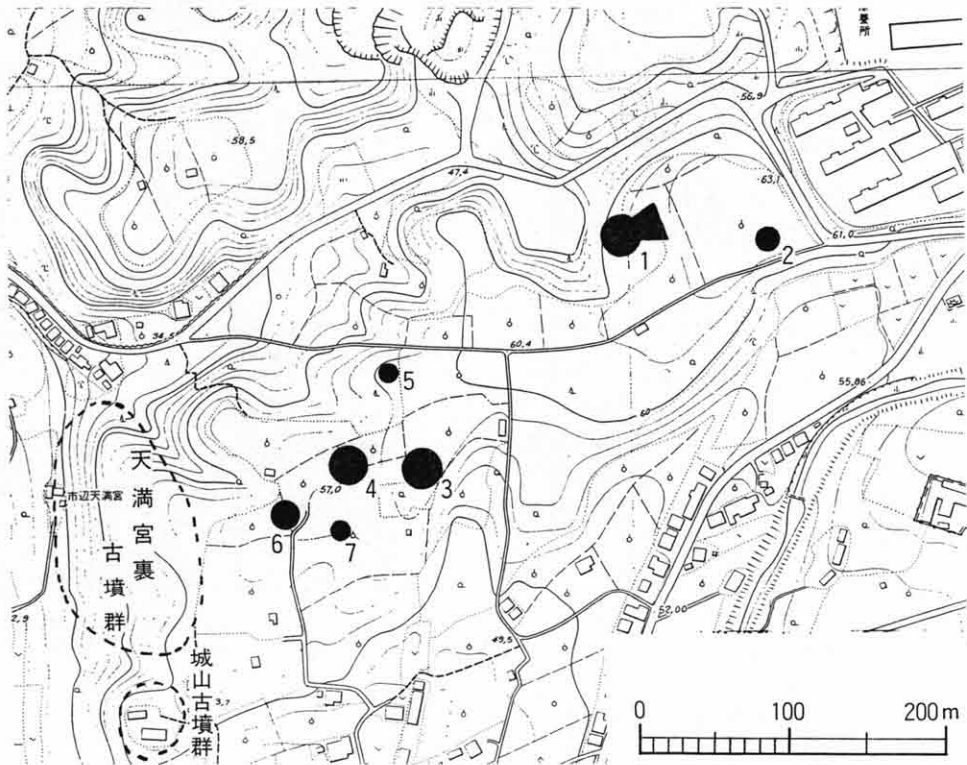
当古墳群は小字名より石神古墳群と命名し、墳丘が残存する最大規模のものを1号墳とし、他は東より2号墳～7号墳とした。

踏査にあたってはボーリング棒にて石室の確認を行い、1号墳については地形測量を行った。また、1号墳東端まで砂利採取が始められたため城陽市教育委員会の協力を得て周濠の一部を確認した。

## 2. 古墳群の位置

石神古墳群は城陽市中石神、市辺北山に所在する。

当古墳群は国鉄奈良線青谷駅より東方約1kmの東から西にのびる丘陵上に位置し、南北200m・東西400mの西に緩く傾斜した丘陵平坦面に築かれている。丘陵一帯は竹林・果樹



第2図 石神古墳群分布図

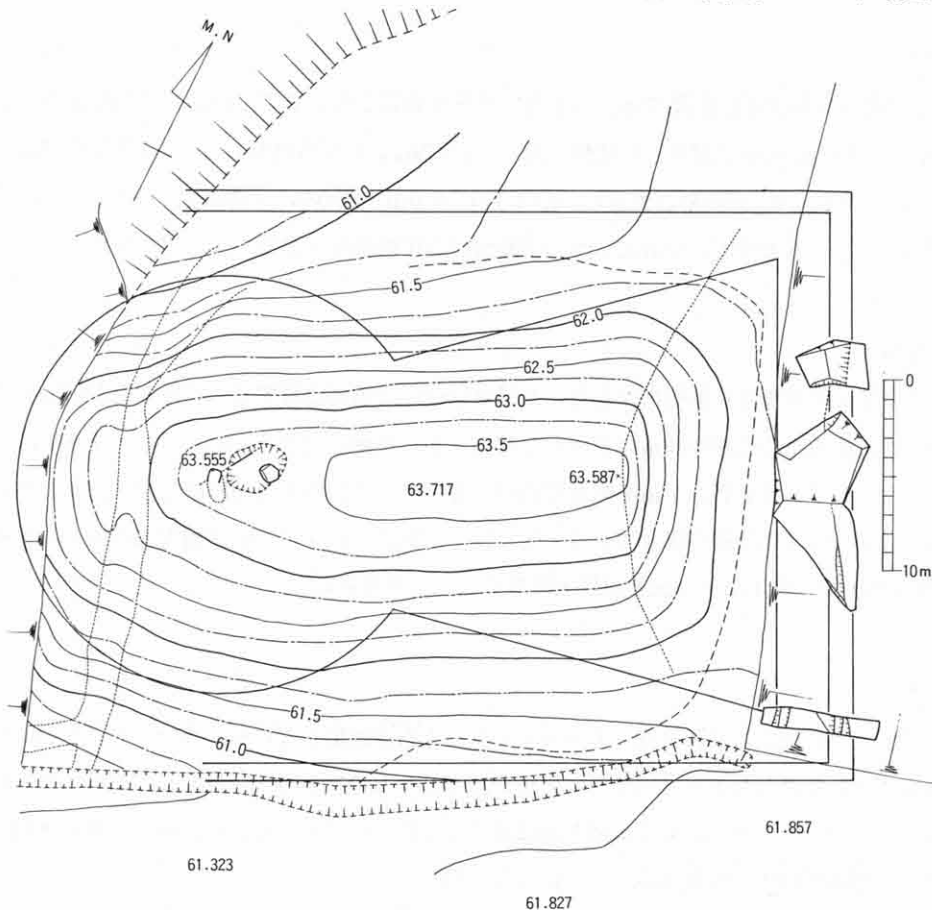
園・茶畑になっている。同丘陵には、西端及びそれより派出する丘陵上に天満宮古墳群(7基)・南西端に城山古墳群(2基)が確認されている。また東方の青谷古墳(国立南京都病院内)も同丘陵上である。丘陵西側は奈良街道が南北に走る平野となり、南側は東西に走る田原道(国道307号線)と青谷川が流れている。青谷川を隔てた南側には30mの前方後円墳のある丸山古墳群(5基)と松尾古墳があり、井手町境の丘陵稜には茶臼塚古墳・上戸塚古墳がある。丘陵北側は小谷をはさんで北石神古墳、北方に黒土古墳群(9基)がある。また、長谷川を越えた北方には青山古墳群がある。

ここに紹介した青山古墳群以南の古墳は全て横穴式石室を内部主体とする後期古墳であり、当古墳群は青谷地域での中心地区である。

### 3. 古墳群の概要

#### 1号墳

丘陵北東部に位置し、古墳群中唯一墳丘が残存している。墳頂部標高は63.7m、墳丘は



第3図 石神1号墳墳丘測量図

東北東から西南西に長く、全長37m・幅20m・高さ2m、西側は崖となり、墳丘の一部が削られている。東側は墳丘裾まで砂利採取が行われたが、削平直前に幅約5mの周濠を確認した。墳頂部西半中央に石室が露出し、西側壁と天井石がみられる。

現状では墳形を断定することは困難であるが、大正時代に墳丘が改変されたことや、石室の位置、周濠の形状からみて、前方後円墳と考えられ、石室を中心として後円部径20m～22m・前方部幅24m前後・全長は約40mに復元できる。墳丘主軸方位はS63°30'W。横穴式石室の開口方向はS30°Wで、露出した石材の一つは天井石であることから、玄室は幅1.5m・長さ4m以上となる。天井石に使用している石材はチャートであるが、側壁には厚さ5cmの扁平な石を積み重ねている。

周濠の東辺では、墳丘主軸にほぼ直交する濠外縁30mと墳丘裾一部を確認した。周濠の深さは1m～0.5mで、底面は一定していない。墳丘裾近くに埴輪片が多く出土した。大正時代の墳丘改変後の盗掘で石室内より鉄剣が多数出土したといわれる。<sup>(注2)</sup>

## 2号墳

1号墳の東約80mに位置する。古墳群中最初に発見した古墳で、石室のほとんどが削平され、崖断面に石室が露出した状態であった。石室はほぼ南に開口する横穴式石室であったと考えられるが、東側壁と奥壁の一部2.7m×2.0m・深さ0.8mを残すのみである。石室(玄室)内より須恵器杯蓋が出土した。崖断面に墳丘裾を確認することはできなかった。

## 3号墳

3号墳～7号墳は丘陵西半にあり、3号墳はその東端に位置する。石材3石が露出している。石室を中心に直径30mのわずかな盛り上がりを観察できる。ボーリング探査では、露出している石材2石と1mを隔てて石材の並びと思われるものを確認した。露出している石材がすべて原位置を保っているとすれば、南西に開口する片袖式横穴式石室で、玄室幅1.8m・羨道幅1m・全長8m以上になるものと考えられる。

## 4号墳

丘陵西半の中央に位置する。チャートの大石4石が露出している。ボーリング棒による探査では、露出した1石は天井石か側壁が落下したものであるが、奥壁と西側壁の2石は原位置をとどめており、もう1石も原位置をとどめるものであれば、玄室幅約2m・長さ5mの南に開口する片袖式横穴式石室と考えられる。

墳丘は削平されているが、一部に弧状の極低い段が観察できることから、直径25mの円

墳と考えられる。

#### 5号墳

4号墳の北東100mの丘陵北辺に位置する。石材1石が露出している。この石材は1m×0.4mで一方は面をつくっている。奥壁のものと考えられ、南西に開口する横穴式石室と思われる。花崗岩系の石材を使用しているのは古墳群中他では見られない。墳丘は削平され規模、墳形を知ることはできない。

#### 6号墳

4号墳より西80mにあり、古墳群中最も西に位置する。天満宮2号墳からは150m東になる。農道に石材が1石露出しており、そこより北へ2mにわたり地中に石を確認した。南に開口する横穴式石室と思われる。これを中心にして直径20mのわずかな盛り上がりとなっている。

#### 7号墳

4号墳の南西に位置する。畑の石垣に1mと0.8mの2石が並んでいる。石垣に使用されているもののほとんどは10cm～30cmの礫であるのに対し不自然であり、動かして持って来たとは考え難い。古墳の可能性が考えられる。

### 4. 出土遺物

1号墳からは、円筒埴輪と土師器・布目瓦がある。すべて東側周濠より出土したもので、円筒埴輪は墳丘より落下した状態で墳丘裾部に集中して出土した。以下、埴輪を中心に紹介したい。

1は、焼成の不良な須恵質のもので、2段目に円孔2箇所を設けている。底径16.7cmで上に広がる。外面調整は目の粗い左斜めの縦ハケで、底部は未調整である。内面は指ナデのみである。

2は、胎土は粗雑で、焼成は不良なものである。外面調整は1と同じであるが、内面は口縁部より7cmまで斜め横ハケが残り、それより下は指ナデによる。

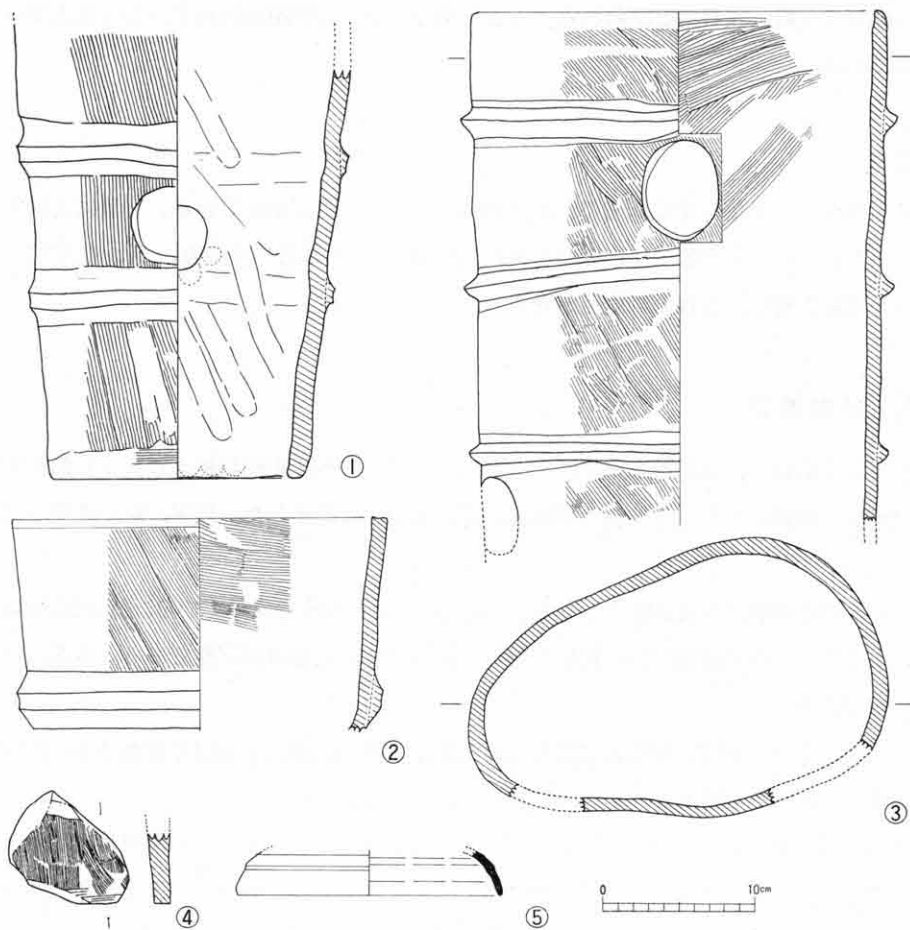
3は、須恵質のもので、楕円筒にゆがんでいる。上段より2段目と4段目に各2か所の円孔を設けている。タガ断面は三角形である。外面調整は、上段より1段目は左斜めの縦ハケの後一部を横ナデ、2段目以下は左斜め縦ハケをおこなっている。内面は斜めハケにより調整している。その他の埴輪は、1～3に類する小片であるが、ハケ目の細かいもの

(4)が1点ある。土師器は小片のため器形など詳しいことはわからない。瓦は周濠中層より出土したもので、須恵質の縄目叩きを有する平瓦片1点である。

2号墳では、崖断面の玄室底部より採取した須恵器杯蓋片がある。口径17.6cm。焼成胎土は緻密である。

## 5. ま と め

石神古墳群は、横穴式石室を内部主体とする後期の群集墳である。出土遺物でみれば、1号墳の埴輪は川西編年<sup>(注3)</sup>Vに属するところから、後期前半に築造され、周濠は瓦の出土から奈良時代以降まで残っていたと考えられる。2号墳出土の須恵器は陶邑編年<sup>(注4)</sup>Ⅱ-3に属するもので、後期前半のものと考えられる。



第4図 出土遺物実測図  
1~4. 1号墳周濠内 5. 2号墳石室内

これまでこの付近の後期前方後円墳は、丸山1号墳(30m)と青山1号墳(25m)、長池古墳(50m)の3基が知られていた。南山城地域では宇治二子塚古墳(105m)と坊主山1号墳(45m)が知られている。しかし、長池古墳と坊主山1号墳は横穴式石室を内部主体としていない。<sup>(注5)</sup>二子塚古墳の内部構造は明らかでないが、横穴式石室とすれば南山城で2番目の横穴式石室をもつ後期前方後円墳に位置づけられる。

石神1号墳は規模から考えて、付近を治める有力な豪族のものであることは疑いない。そして、青谷にある古墳時代後期に属する古墳は、それぞれの古墳群として独立したかたちで存在しているが、発見されていない古墳も多く存在すると考えられることから、石神1号墳を中心とする青谷古墳群としてまとめられるのではないかと思われる。

古墳群発見のきっかけとなった砂利採掘断面で、古墳のものとは思われない溝状の落ち込みが観察できる。これは、1号墳濠内より瓦が出土したことや、田原道がすぐ南側を通ること、丘陵上が平坦であることから、複合遺跡である可能性が高い。

青谷地域は開発があまり行われていないため古墳の破壊も少なく、よく残されている。しかし、未発見の古墳や遺跡も多くあると思われ、これから予想される開発に対し以後も巡視を行い、実態の把握に努めたい。

なお、踏査をともに行った柏井光彦氏、1号墳測量にご協力いただいた土地所有者の西山泰史氏をはじめ城陽市教育委員会文化財調査員伊賀高弘、三崎 力・吉村秀基・山本則之、天理大学学生北埜善史・石田真一諸氏、そして京都府埋蔵文化財調査研究センター小池寛氏・城陽市教育委員会近藤義行氏にはあらゆる面でご協力・ご教示頂いた。ここに謝意を表したい。

(梶本敏三＝京都府文化財保護指導委員)

注1 『京都府遺跡地図』第5分冊 京都府教育委員会 1985

注2 土地所有者西山泰史氏の話による。

注3 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2

注4 『陶邑Ⅱ』大阪府文化財調査報告書第29輯 大阪府教育委員会 1978

注5 奥村清一郎「各地域における最後の前方後円墳 京都府南部」『考古学研究』104



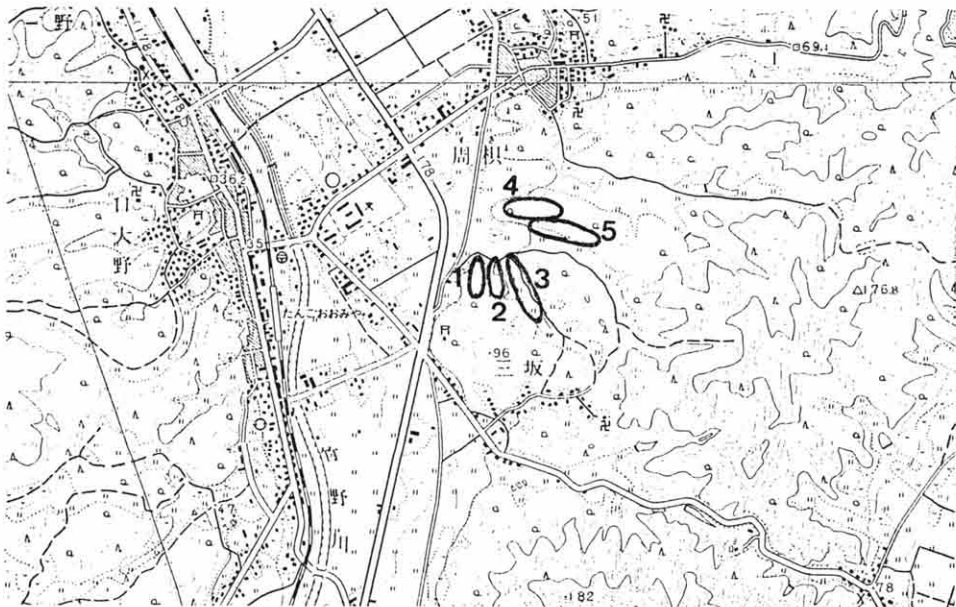
## 有明古墳群・横穴群について

増 田 孝 彦

### 1. はじめに

ここに紹介する有明古墳群・横穴群は、中郡大宮町字三坂小字有明に所在し、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の三坂団地造成工事に伴い発掘調査を行ったものである。

本古墳群・横穴群は、竹野川右岸の南北にのびる低丘陵の稜部・東側斜面裾部に立地する。三坂団地造成予定地内においては、本古墳群の北東方200mの丘陵上で、昭和59年度に本事業に伴う初めての発掘調査が京都府教育委員会の手で行われ、弥生時代後期の台状墓や古墳時代後期の古墳が検出されている(帯城古墳群)。また、昭和60年度には、引き続き同じ丘陵の南斜面より、7世紀中葉を中心とする太田鼻横穴群(19基)の調査が行われている。その他、有明古墳群・横穴群の存在する丘陵の東側に広がる狭小な谷部には、弥生時代後期の土器が散布する里山遺跡が広がっている。また、現在沈砂池が造られている部分には、過去に農道が造られた際に一部削られた横穴(有明5号横穴)も存在する。



第1図 三坂団地内遺跡分布図 (1/25,000)

1. 有明古墳群 2. 有明横穴群 3. 里山遺跡 4. 帯城古墳群 5. 太田鼻横穴群

有明古墳群は、三坂団地内を縦貫する道路建設が計画されたため、京都府教育委員会が試掘調査を行い、墓塚の存在を確認したあと、当調査研究センターが引き続き調査を行ったものである。

有明横穴群については、有明古墳群調査中に新たに確認したもので、道路建設の際、切土した法面に横穴が一部かかるため、有明古墳群の調査と併行して行った。

調査は昭和60年11月18日より開始し昭和61年3月23日まで行った。

## 2. 調査概要

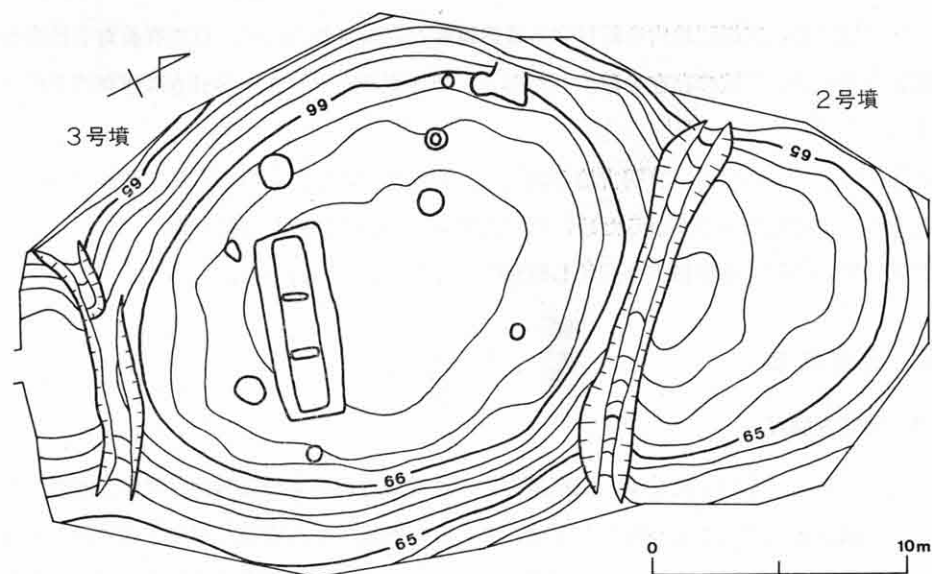
### (1) 有明古墳群

周辺の地形測量を行った結果、試掘調査により確認されたもの以外に、尾根先端側にもう1基古墳が存在することが明らかとなった。そのため、分布調査で尾根先端斜面で確認されているものを1号墳とし、順に南側に向かい2号墳、試掘調査で確認したものを3号墳とした。

**2号墳** 墳丘基底は尾根稜部を削り出し、方形台状に整形するが、盛土により墳丘が形成されていたようで、尾根斜面にその流失分が認められた。墳丘は、2・3号墳が直列して並ばず、3号墳に比してやや東側に傾く。そのため、尾根高位側に設けられた溝も尾根に直交していない。墳丘規模は、約1/3が造成予定地外となるため、推定規模となるが、長辺約13m×短辺12mの方形墳で、溝幅約1.5m、西側からの高さ1.2mを測る。埋葬施設は検出されなかったが、墳丘頂部中央で金環1が出土した。

**3号墳** 墳丘は、2号墳同様尾根稜部を削り出し方形台に成形するが、尾根両側面がやや膨らんだ長方形を呈する。盛土はほとんど有さない。墳丘基底は、西側については削り出し面が平坦化しているため明瞭に区別されるが、東側はそれを判断する痕跡が認められなかった。また、尾根高位・低位側には、尾根に直交する溝が設けられているが、北側溝については、2号墳に削られておりその規模は不明である。南側溝は、幅1.8m・中央部分での深さ0.3mの規模をもつ。古墳の復元推定規模は、長辺約20m×短辺約17m、西側からの高さ1.3mを測る。

埋葬施設は、墳頂部中央よりやや南側で1か所確認した。主軸を尾根に直交する二段墓塚で、地山削平面よりその掘形を検出した。掘形の規模は、長さ7.2m×幅2.8m・深さ0.75mの長大なもので、木棺部分の掘形も長さ6.4m×幅1.1m・深さ0.5mとかなり大きな規模を誇る。木棺は、組合式木棺が使用されていたと推定され、両木口部分を粘土を混ぜた土により固定していた。また、木口板・側板等は、淡赤褐色に土色に変化しており、その痕跡を見ることができた。木棺の規模は、長さ5.2m×幅0.7m・深さ0.5mで、棺幅



第2図 有明2・3号墳地形図

は、東側がやや広がっている。底面には、棺を3分するかのように、等間隔で2か所凹んだ部分が認められた。この部分は、幅約30cm・深さ9cmで、木が存在していたようで淡赤褐色に土色に変化していた。

出土した遺物は、西側木口部分より刀子1、棺内中央よりやや西側で鉄鏃1、東側で竖櫛3が出土した。

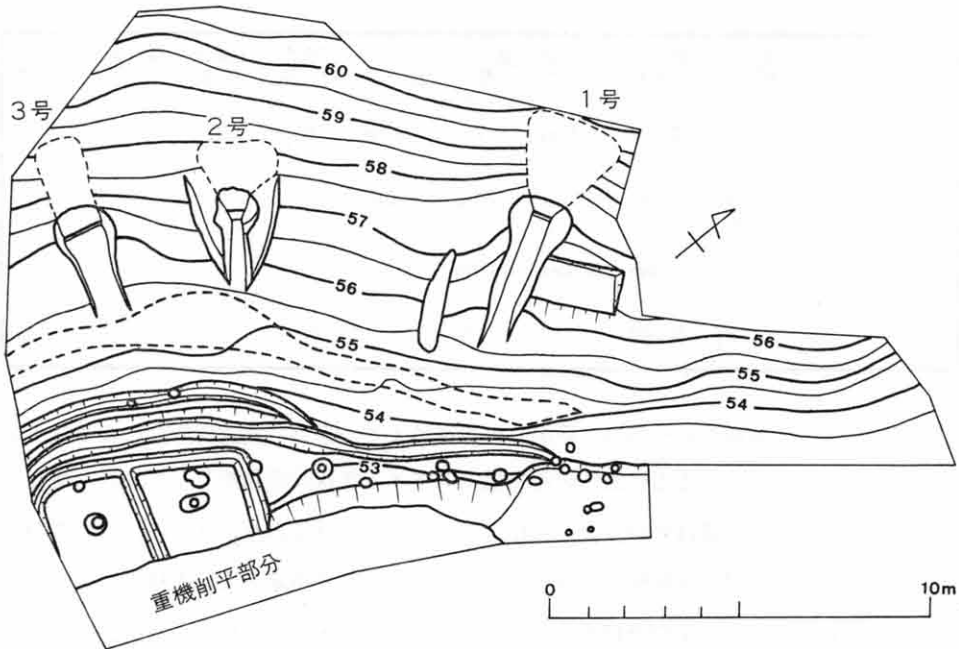
その他、墳頂部には直径5～8cm程の花崗岩の礫を詰め、底面に炭の広がる浅い土塚や、直径0.6m～1.3m・深さ1m～1.8mを測る土塚6か所を検出したが、遺物等は出土せず、時期・性格等は不明である。

## (2) 有明横穴群

3号墳の東側、丘陵裾部で検出したもので、北端から1号・2号・3号横穴と命名した。一部調査地南側で、3号横穴に隣接する4号横穴の墓道も検出した。いずれの横穴も、検出時は開口しておらず、墓道・玄室とも炭が混入した黒褐色土により埋まっていた。

各横穴の規模は表に示す通りであるが、平面形については、3号横穴を除き、奥壁部がもっとも広く、玄門部が狭い袋状をなしている。立面形は、壁と天井部の境がほとんどなくカマボコ状を呈している。玄室前面には墓道があり、墓道と玄門の境には低い段がつき、仕切り溝が設けられている(2号・3号横穴)。また、1号横穴のように、墓道の横に1.9m×1mの平坦部を設けたり、2号横穴のように、墓道の両側に幅25cm～30cm程の狭い段を有するものもある。

**1号横穴** 調査した中でもっとも規模が大きいものであるが、玄室内は、天井部中央の



第3図 有明1・2・3号横穴地形図

落下が著しく、玄室前面には長い墓道が取りつく。玄室内床面上より、寄せ集められたような状態の人骨約4体分と、刀子1・須恵器・土師器の出土を見たが、土器類は、ほとんど破碎され分散し、完形品はわずか4点のみであった。この出土した人骨の一部は、子供の骨と思われる、頭蓋骨の小さいものや、顎の骨を見る限りでは、乳歯のみ生え揃い、永久歯がまだ残ったものがあることから、幼児の埋葬が行われていた可能性がある。現在、この人骨の鑑定依頼中なので、その結果を待ち後日報告したい。玄室内で出土した土器類同様、墓道からも須恵器・土師器が出土したが、破碎された状態のものばかりであった。

**2号横穴** 玄室天井部の落下が著しく、玄室内からは破碎された土師器皿が4個体分出土したのみで人骨等はみられなかった。墓道部分からも遺物は出土していない。また、玄室内奥壁床面には、墓道と平行する凹みが2か所認められた。

**3号横穴** 天井部の落下もほとんどなく、築造時の姿をよくとどめていた。玄室奥壁床面より頭蓋骨1、玄門近くでは鉄鏃1が出土し、玄室中央部では平安時代後期頃に比定される杯・灰釉瓶が出土しているが、横穴に直接係る土器の出土はみられなかった。また、墓道からも多くの須恵器が出土したが、1号横穴同様破碎された状態であった。

**4号横穴** 墓道の一部のみ確認し、掘削を行ったが、1号・3号横穴同様、多数の須恵器・土師器が破碎された状態で出土した。

これらの横穴群は、花崗岩が風化した地山層を刳貫いて造られており、崩壊しやすい状

各横穴規模一覧表

	玄室長さ	玄室最大幅	玄室高さ	墓道幅	墓道長さ	須恵器有無	土師器有無	鉄器有無	人骨有無
1号	2.7m	2.6m	1.13m	0.7m	3.45m	有	有	有	有
2号	1.7m	2.25m	0.75m	0.65m	1.9m	無	有	無	無
3号	2.5m	1.25m	0.85m	0.9m	2.1m	有	有	有	有
4号	不明	不明	不明	不明	不明	有	有	不明	不明

態となっており、検出面にみられた炭混りの黒褐色土の一部は、玄室内床面にまで及んでいるが、天井部の落下とともに玄門付近ではサンドイッチ状の堆積をなしていた。また1号横穴より出土した人骨は骨の位置が正位置になくバラバラであり、2号横穴では遺物が少なく、3号横穴では、頭蓋骨しか残っておらず、平安時代後期の土器も横穴内から出土していることから、黒色土が堆積する以前に横穴を再利用するために玄室内が整理されたと考えられる。このことを裏付けるように、横穴前面の斜面には、横穴に伴う遺物がかき出され堆積しており、多量の須恵器・土師器片の散乱が認められ、それらとともに鉄鏃、人骨片も認められた。また、特筆すべきことに、各横穴埋土からは、カマド片が出土し、1号横穴からは、フイゴ羽口も出土した。4号横穴墓道や、横穴前面の斜面の堆積層からは炭・カマド片・鉄滓も出土している。

この堆積土を除去した結果、横穴前面には、各横穴に続く道と思われる幅70cmの平坦部が設けられていた。さらにこの平坦部から下にのびる斜面の掘り下げを行ったところ、斜面に幅50cm程の溝2条と、斜面が平坦化したところで竪穴式住居1・ピット18か所を検出した。斜面で検出した上段の溝1は、途中で切れてしまい下段の溝2につながっている。溝2は、住居の掘形のすぐ西側に取りつくものであるが、調査地の北端で終わっている。いずれも、南から北へ流れるもので調査中でも湧水が著しい場合は、排水溝の役目を果たしていた。

竪穴式住居跡は、造成工事に伴いその1/2を削られていたが、本来一辺7m程・深さ50cmの規模を有していたと思われる。住居内には、排水溝がめぐらされており、さらに住居内中央で住居を2分するような溝も検出された。住居に伴うと思われる柱穴は2か所確認できた。時期については、住居内床面・柱穴とも遺物が検出されなかったため不明である。

多数検出した柱穴についても、方向性・規模もまちまちであり、つながりが認められず、

一部類似するものも見られたが、調査地東側が造成により削られていることからその性格を明らかにすることはできなかった。各柱穴とも遺物が皆無のため時期は不明である。

### 3. ま と め

有明2・3号墳については、その出土遺物が少なく築造時期を明確にすることはできないが、溝の切り合い関係からすれば、3号墳は2号墳よりも先行する。また、北側の丘陵で調査された帯城古墳群の調査結果や、立地・主体部の規模・主体部に伴う遺物が乏しいことや他の例からすると、3号墳は5世紀頃に築造されたものと考えられる。

有明横穴群については、太田鼻横穴群のように、埋葬時の状態をとどめておらず、後世に再利用されたようで、1号墳を除き埋葬時の遺物が認められなかった。时期的には、1号墳に残されていた遺物・横穴前面の斜面より出土した遺物からすると6世紀末～7世紀中葉にかけて築造されたものと考えられ、太田鼻横穴群と並行するものである。また、調査した横穴以外にも、同じ東斜面にあと5基の横穴が存在することが明らかとなった。

横穴内及びその周辺から出土したカマド片・フィゴ羽口・鉄滓・2号横穴の灯明皿等から判断すれば、製鉄を行った工房跡がこの横穴付近に存在すると思われる。この工房跡に関連するものでは、3号横穴よりも南へ25m・標高59m付近でもカマド片が採集でき、その散布は広範囲にわたっている。また、横穴がこの工房に伴い整理利用されたものか、1号横穴の散乱する人骨が、他の横穴から持ち込まれたものなのか、住居についてもこれに伴うものなのか不明である。この工房に伴う出土遺物については、現在整理段階なので、時期については、後日報告することとする。

「国営農地開発事業」に伴う発掘調査は、当調査研究センターが行ったものでは、今回が最初の調査であるが、有明古墳群、横穴群は丹後の歴史を考える上で重要な資料を提供したばかりでなく、事前の分布調査でも確認できないものであり、今後調査を行うにあたって充分注意する必要がある。

(増田孝彦＝当センター調査課調査員)



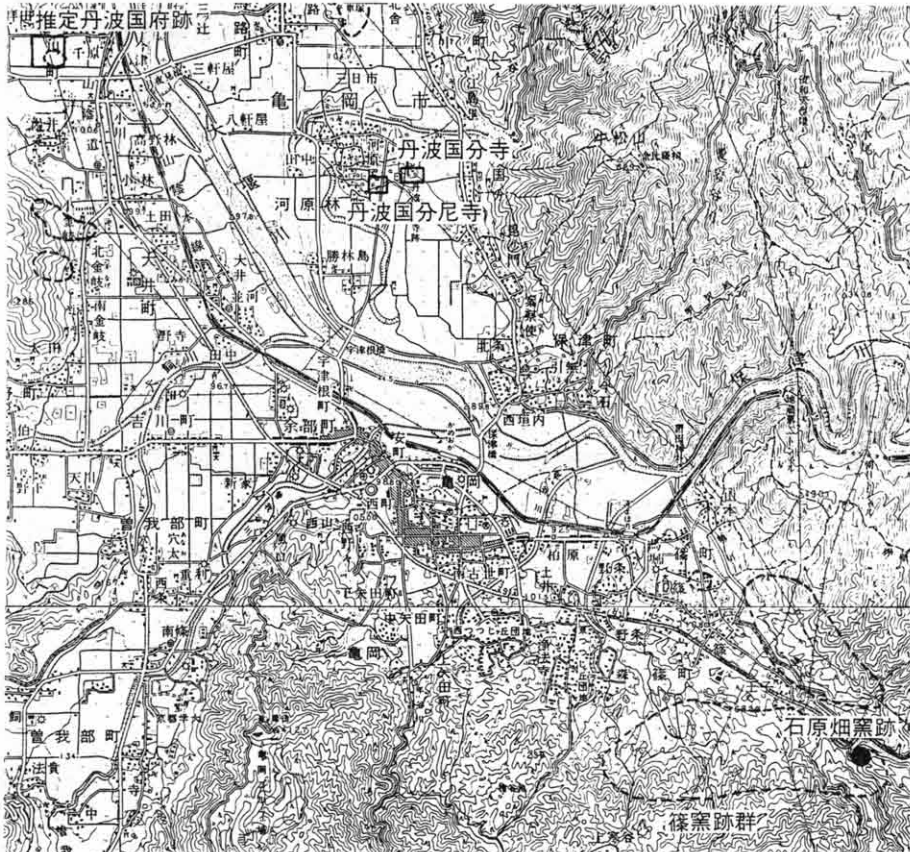
## 石原畑窯跡出土のへら描き文字・文様の須恵器について

石 井 清 司

### 1. はじめに

石原畑窯跡が所在する亀岡市篠町には、篠窯跡群と呼称される一大須恵器生産窯があり、石原畑窯跡は、その東端に位置する。

石原畑窯跡は、昭和50年度京都府教育委員会により篠窯跡群の分布調査、試掘調査が行われ、窯の存在が確認された。発掘調査は、昭和57年度、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターによって行われ、その結果、須恵器生産を目的とした3基の半地下式窖窯が明らかとなった。



第1図 石原畑窯跡位置図

石原畑1号窯は、現存長約5.0m・床面最大幅約1.3m・床面傾斜角31°を測る半地下式窖窯であり、1号窯に隣接して2号窯がある。石原畑2号窯は、1号窯の南3mに位置し、全長約8.4m・床面最大幅約1.2m・床面傾斜角30°30′を測る半地下式窖窯である。石原畑3号窯は、3号窯の東約8mの丘陵上部にあり、自然地形を利用した半地下式窖窯である。各窯の出土遺物については、石原畑1・2号窯が9世紀中頃、石原畑3号窯が1・2号窯より古く、8世紀中頃と考えられている。

この石原畑窯跡の調査概要については『京都府遺跡調査報告書』第2冊、一條窯跡群I-1にまとめられたが、その時点では整理作業が不十分なため、記載できなかったものとしてヘラ描き文字・文様の須恵器がある。

## 2. ヘラ描き文字・文様

石原畑窯跡出土土器のうち、ヘラ描き文字・文様の記されたものは、灰原内出土遺物のうち現在33個体を確認しているが、攪乱土層出土遺物が未整理であるため、整理作業が進めば、さらにヘラ描き土器は増加する可能性がある。ここでは攪乱土層出土の未整理分を除いた、1・2・3号窯灰原内出土のヘラ描き土器について説明を行う。

現在確認されたヘラ描き文字・文様には、「為」「大」「大夫カ」のヘラ描き文字、「本」「メ」「ノ」「川」のヘラ描き文様のほか、文字と思われるが判読できないものとして「𠂔」「𠂔」がある。

「為」は、3号窯灰原内により2点出土した。「為」とヘラ描きされている土器の器種は蓋A・Bに限定でき、ヘラ描きの位置も天井部内面の中心に施される。「為」の筆蹟をみると1・2は別人が書いたものと思われる。

「大」は、3号窯灰原内より13点出土した。「大」とヘラ描きされている土器の器種は杯A・皿B・蓋のほか、壺の体部片があるが、杯Aに施されているものが多い。「大」の施文位置は、杯では底部内面に施されているものが4点、口縁部内面に施されているものが4点あり、ほぼ位置が限定できる。皿は2点と出土量が少なく、施文の位置は内底面に限定できる。壺は体部片であり、器種については不明瞭であるが、壺Bと思われる。施文位置は体部外面にある。「大」の筆蹟をみると、四種に大別できる。

「大夫カ」は、細片のため器種は不明瞭であるが、壺の体部片の可能性はある。ヘラ描き文字は、上部を一部欠損しているため「大」の横棒の有無が不確定である。「夫」も筆順からいくと、「人」の部分の左側をまず書くが、右の「丨」を書いたのち、左の斜めを加えて「夫」と描くため、「大夫」と判読してよいか疑問が残る。「大夫カ」は3号窯灰原内より出土した。

付表1 石原畑窯跡出土のへら描き文字・文様

番号	記号文字	器種	へら記号, 文字の位置	時期	出土地点
1	為	蓋 A	天井部内面	3号窯期	灰原内
2	為	蓋 A	天井部内面	3号窯期	灰原内
3	彳	蓋 B	天井部内面	3号窯期 (?)	灰原内
4	ホ	杯A底部片	底部内面	3号窯期	A K 9 区
5	大	皿 B	皿内底面	3号窯期	耕土・床土
6	大	杯A(?)	口縁部内面	3号窯期	灰原内
7	大	蓋A(?)	天井部内面	3号窯期	灰原内
8	大	皿 B	底部内面中央	3号窯期	灰原内
9	大	杯 A	口縁部内面	3号窯期	灰原内
10	木カ	杯 A	底部内面	3号窯期	灰原内
11	大夫カ	不明	外面	3号窯期	暗黄褐色灰原
12	大	杯 A	底部内面	3号窯期	SD05
13	大	杯 A	底部内面	3号窯期	灰原内
14	大	杯A(?) or B	口縁部内面	3号窯期	灰原内
15	才	杯 A	底部内面	3号窯期 (?)	灰原内
16	才	杯 A	底部内面	3号窯期	灰原内
17	大	壺 B	体部外面・腹部	3号窯期	灰原内
18	大	杯 A	底部内面	3号窯期	灰原内
19	大	杯 A	口縁部内面	3号窯期	灰原内
20	大	杯 A	口縁部内面	3号窯期	灰原内
21	大	杯 A	底部内面	3号窯期	灰原内

番 号	記号文字	器 種	ヘラ記号, 文字の位置	時 期	出 土 地 点
22	大	蓋 A	天井部内面	3号窯期	灰原内
23	木カ	杯 A	底部内面	3号窯期	灰原内
24	本	蓋 B	天井部内面	3号窯期	灰原内
25	III	蓋	天井部外面	3号窯期	灰原内
26	IIII	皿 (?)	底部内面	3号窯期	灰原内
27	IIII	蓋	天井部外面	3号窯期 (?)	灰原内

ヘラ描き文字と思われるが、判読不明のものとして「𠄎」「𠄏」「𠄐」がある。「𠄎」は、「為」の変形したものか、あるいは別の意味のものかは不明である。「𠄏」「𠄐」は、「大」の変化したものかどうかは不明である。「𠄎」は、3号窯灰原内より出土した。「𠄏」「𠄐」は、1・2号窯灰原内より出土したが、3号窯に帰属する可能性がある。

ヘラ描き文様は、3号窯灰原のほか、1・2号窯灰原からも出土している。

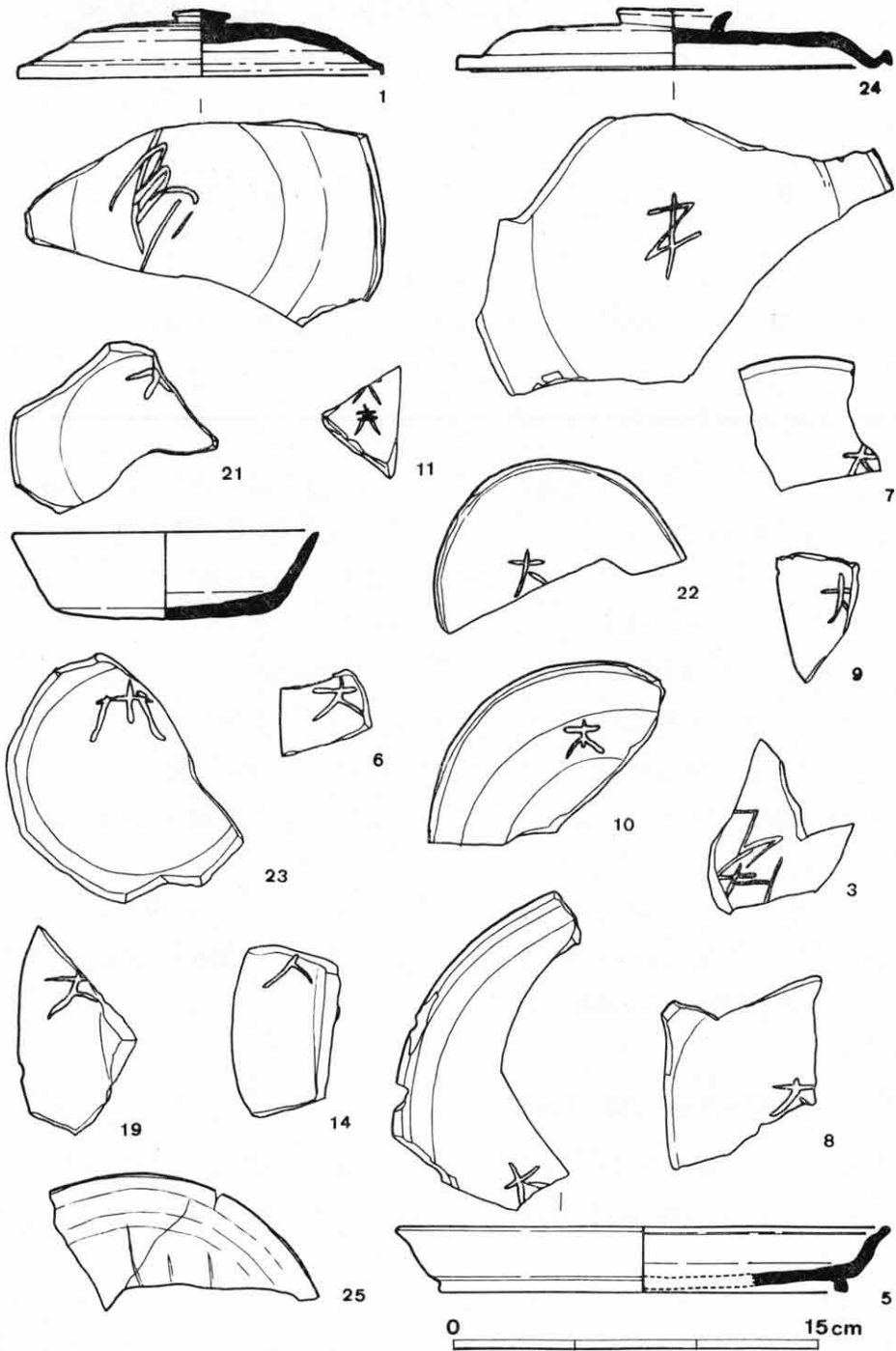
「本」は、3号窯灰原内より出土。器種は蓋Bであり、施文位置は天井部内面である。

「メ」は、6個体出土しており、器種には杯A・杯B・壺がある。施文位置は、底部の内・外面に限定できる。「メ」とヘラ描きされた土器は、3号窯のほか、1・2号窯からも出土している。

「ノ」「ㄥ」「ㄥ」は、横あるいは縦棒を1～4回くり返したもので「ㄥ」の多くが蓋の口縁部あるいは天井部の外面に施されている。「ノ」などのヘラ描き土器は3号窯灰原のほか、1・2号窯灰原からも出土している。

### 3. 窯体内におけるヘラ描き土器の位置

石原畑1・2・3号窯では窯体および灰原を含めて、発掘調査を行ったが、1・2・3号窯とも、焼成後、製品を取り出したのち、窯の崩壊があったため、窯体内での土器の出土量は少なかった。このため、製品の「窯入れ」に際して、ヘラ描き文字・文様の置かれていた位置を復元することは困難であり、推定の域を出ないが、灰原内出土の重ね焼きの例から復元すると、ヘラ記号の位置は、合理的である。すなわち、石原畑3号窯では杯Cを正位置にすえ、その上に蓋Bを反転させて重ねたもの、杯Aを正位置のまま重ねあわせたものなどがあり、もし、ヘラ描きの土器を最上段にすえた場合、ヘラ描きの位置が杯Aでは



第2図 ヘラ描き文字・文様土器実測図



第3図 ヘラ描き文字・文様土器拓影

口縁部および底部の内面，蓋では天井部内面に限定でき，「窯出し」に際してヘラ描き土器を識別することは簡単であったと考えられる。

1・2号窯灰原出土の重ね焼きをみると，杯Bは杯Bのみで重ねあわせ，蓋は蓋のみで重ねあわせたものが多く，1・2号窯のヘラ描き土器のヘラ記号の位置と符号する。ただ，1・2号窯ではヘラ記号も杯の底部外面に施すものと，内面に施すもの，壺の底部外面に



施すものがあり、「窯入れ」の際の製品の積み上げに変化がないかぎり、製品の取り上げ時にはヘラ記号として、用途をなさないものがある。

#### 4. 篠窯跡群におけるヘラ描き文字・文様の出土例

これまで篠窯跡群において発掘調査が行われた窯跡は21基を数える。これらの窯については現在整理中であり、今後詳細な報告がなされるが、筆者が実見した範囲でみると、ヘラ描き文字・文様をもつ須恵器を含むものは、8世紀中葉の石原畑3号窯・西長尾奥第1窯跡から、900年を前後する時期の西長尾3号窯までであるが、10世紀中頃の前山2・3号窯以降、1,000年を前後する時期の西長尾5号窯までは皆無か、あるいはあったとしても極少である。このヘラ描き文字・文様をもつ須恵器をヘラ描き文字について限定すれば、石原畑3号窯出土のものがその大半をしめ、西長尾奥第2窯跡群1号窯で「大」とヘラ描きされたものが数点、「日」とヘラ描きされたものが1点あるのみである。<sup>(注1)</sup>このように篠窯跡群の内では、ヘラ描き文字に限定すれば、奈良時代の中葉に操業された窯の遺物にのみ施されており、それ以降の窯には認められない。同じ様相は京都府下の窯でも認められる。

#### 5. 京都府下におけるヘラ描き文字の類例

京都府下における須恵器窯跡の調査は15件以上を数え、そのうち、四天王寺に瓦を供給した平野山瓦窯、大和豊浦寺創建に関わる隼上り瓦窯跡、北野廃寺との関係が考えられる幡枝瓦窯跡などの瓦陶兼業窯がある。これら瓦陶兼業窯を含めた須恵器窯のなかから、ヘラ描き文字を須恵器に刻んだものをみると、加茂町西柵窯跡<sup>(注2)</sup>、京北町周山瓦窯<sup>(注3)</sup>の2例がある。

加茂町西柵窯跡は相楽郡加茂町に所在し、隣接した平城京、あるいは山城国分寺などの寺院・官衙を対象として操業された須恵器窯である。ヘラ描き文字・文様をもつ須恵器は、245個体を数え、その多くが杯・皿であり、ヘラ描き文字の位置の大半が底部外面である。西柵窯跡出土のヘラ描き文字・文様には、意味不詳の「メ」「ノ」「//」などととともに、「大」「大八」と刻まれたものがあり、「大」と記されたものは15個体、「大八」と記されたものは1個体を数える。西柵窯跡の操業時期は、出土遺物から奈良時代前半～中頃と考えられており、ヘラ描き文字をもつこととともに、石原畑3号窯とよく似た様相を呈する。

南山城地域では西柵窯跡と相前後して操業された窯に、綴喜郡田辺町所在のマムシ谷窯<sup>(注4)</sup>がある。マムシ谷窯出土の遺物のうち、ヘラ描きをもつものは窯体内に限られ、有台杯身の7点、中形甕の1点の合計8点があり、ヘラ記号は「-」「メ」などがあるが、文字と判読する可能性のものはない。

南山城地域において、相前後した操業時期が考えられる西柵窯跡とマムシ谷窯跡でのヘ

ラ描き文字・文様の種類および多寡の相違について、林日佐子氏はマムシ谷窯が「自地域内での小規模な需要に対応していた」<sup>(注5)</sup>と考えられている。

京北町周山瓦窯では4基の窯が確認され、周山廃寺の造営と深くかかわった瓦陶兼業窯である。発掘調査の結果、周山瓦窯は須恵器によると5段階に細分でき、平城Ⅱ期に相当する第5段階の1号窯3次操業面より出土した直口壺の肩部に「大家凡」と記されたヘラ描き文字がある。この窯跡から出土した「大家凡」については、宇野隆夫氏は、「本例の『大家凡』については、前後の文章がないため、具体的になにをさすかは難かしい(中略)、これは供給先を示し、それを造営の主体となった人々の居所ないし、その集落を示す可能性<sup>(注6)</sup>がある」と考えておられる。このように、京都府下でみるかぎり、ヘラ描き文字に限定していえば、奈良時代の中頃を前後する時期に限られ、消費地との関連でいえば、西瀬窯は平城京あるいはその他の官衙へ、周山瓦窯は周山廃寺への供給を目的とした窯であり、「自地域内での小規模な需要」に対応したマムシ谷窯ではヘラ描き文字をもつ須恵器は認められない。

## 6. ヘラ描き文字・文様について

ヘラ描き文字・文様については各窯の調査において、その存在が指摘され、いくつかの研究も提示されている。ヘラ描き文様(ヘラ記号)については、古くは窯印と考えられていたが、大川清氏<sup>(注7)</sup>は製作者たる工人の仕訳・識別に供するものと考えられ、その説を受けて久永春男氏<sup>(注8)</sup>は「使用者が自己の占有であることを示すため、または一定の用途に属する器物であることを示すために生産者にあらかじめ依頼した記号」とされた。また、中村浩氏<sup>(注9)</sup>は、焼成部上方で天井が焼成作業の期間の初段階に崩壊した陶邑MT206号窯でのヘラ記号の位置に注目し、「窯詰め」「窯出し」時に生産者が類似製品の区分のために使用された記号という結論を導いた。このようにヘラ描き文様(ヘラ記号)については、「2.ヘラ描き文字・文様」で記したように、「窯出し」に際しての識別を意図したかのような位置にあることから、中村氏等が指摘された結論について妥当性を感じる。ただ、石原畑3号窯出土の「為」「大」「大夫カ」のヘラ描き文字をもつ須恵器については西瀬窯の性格とともに窯の歴史的性格を含めて、さらに検討する必要がある。

## 7. 「為」「大」「大夫カ」のヘラ描き文字について

石原畑3号窯出土のヘラ描き文字である「為」「大」「大夫カ」については、その意味を限定することは現状では困難である。ただ、「大」については、ヘラ描きのほか、墨書土器あるいは瓦の線刻文字として類例が知られる。この場合、ヘラ描き土器は製品の半乾燥

に刻まれたもので、生産者あるいは受注者がその場で記すものであるが、墨書土器は製品を供給した消費地で、生産者でない第三者が記したものであり、その性格は異なる可能性がある。ただ、ヘラ記号の最終目的である注文者あるいは供給先への目印、あるいは「大」の意味する目的が同じと考えれば、墨書土器もヘラ描き土器も意図するところは同じであると思われる。

「大」のヘラ描きあるいは墨書された土器は、各地域において出土例が知られる(付表2)。

そのうち、管見による資料では、時期は奈良時代から鎌倉・室町時代にまでおよび、「大」とヘラ描きあるいは墨書された土器を含む遺構は、土坑・溝状遺構のほか、竪穴住居跡内から出土している。このなかで、石原畑3号窯に近接した時期である奈良時代から平安時代初頭までの時期に限定すると、平城宮・長岡宮などの宮都のほか、肥前国府・肥前国分寺・伯耆国庁・出雲国庁・斎宮・石川県安養寺遺跡・同戸水C遺跡・同長者川D遺跡・同寺家遺跡・静岡県伊場遺跡・下野国府・武蔵国府などがある。また、やや性格を異にするのが、恭仁京・下野国分寺・八坂前窯跡などでは「大」のヘラ描きをもつ瓦もある。これらのなかで、土器に限定して「大」とヘラ描き・墨書された遺跡の性格をみると、平城京・長岡宮の宮都・斎宮のための国家機関である斎宮寮、肥前国府・伯耆国庁・出雲国庁・下野国府・武蔵国府などの国府関係、肥前国分寺などの国分寺関係のほか、戸水C遺跡の郡衙級遺跡、長者川D遺跡などの「一般の村落とは異質な性格をもった集落」、寺家遺跡の官衙に関連した祭祀遺跡、伊場遺跡の郡衙遺跡など、官衙あるいはそれに準ずる遺跡での出土例が多い。また石原畑3号窯、西柵窯と同様、<sup>(注10)</sup>「大」などのヘラ描き文字を刻んだ須恵器を生産する窯として大阪府緑丘窯跡がある。

ヘラ描きあるいは墨書土器に記された「大」の文字については、文字自体が1字の単純な語句であるため、その意味を決定することは困難であるが、興味ある消費地での出土例として石川県寺家遺跡がある。寺家遺跡では中央の大型建物群の周辺から判読可能な墨書土器35点中、27点までが「大」の字であるという注目する結果がある。寺家遺跡を含めた石川県下における墨書土器の資料紹介および分析を行われた吉岡康暢氏は、<sup>(注11)</sup>「大」の意味として、「吉」「得」「上」「玉」「富」などの墨書土器を含め「相互の関連性を考えにくい県下の複数遺跡で出土し、全国的にみても使用頻度が高く、(中略)吉祥句的な意味がこめられていることを認めねばならない」と考えている。(また墨書土器とは性格を異にする<sup>(注12)</sup>が、瓦にヘラ描きされた「大」について上原真人氏は、「年長者であることの表示、あるいは身体的特色に基づく表示と理解するのが妥当であろう」と考えている。)このように墨書土器に記された「大」については遺跡の性格、出土状態により、それぞれ意味するところは異なると思われる、吉祥句なのか、役所名あるいは人名、身分の省略なのかは速断する

付表2 「大」とヘラ描きあるいは墨書された土器が出土する遺跡

遺跡名	時代	器種	出土状態その他	記銘位置	文献
1 宮崎県 内野々第Ⅱ遺跡	平安時代 (9世紀)	須恵器杯	ヘラ描き 土師器製作操 業を伴った生 活跡	口縁部外 面	『生目台住宅団地計画 区域内埋蔵文化財等調 査報告書』昭和57年, 宮崎県教育委員会
2 同 赤 坂 遺 跡	平安時代 中期	土 師 器	ヘラ描き 竪穴式住居跡 内	底部内面	『宮崎学園都市遺跡発 掘調査報告書』第3集 昭和60年, 宮崎県教育 委員会
3 佐賀県 肥前国分尼寺跡	奈良時代 ?	不 詳	墨 書 築地外の溝, その他 「法」「法華」 「梅過」「南」 「高石」	不 詳	『肥前国府跡Ⅲ』 昭和60年, 佐賀県教育 委員会
4 同 肥 前 国 府 跡	奈良時代	須恵器杯	墨 書 ヘラ描き 後殿の柱穴から 切られた溝 (SD068) SE302	底部外面	
5 福岡県 上 須 川					42の文献に同じ
6 島根県 出 雲 国 庁	奈良時代	不 詳	墨 書 不詳 「酒杯」「少目」 「口女」「賀」 「厨」ほか	不 詳	『山陰の国府と律令時 代』 昭和55年 財島根県教育文化財団
7 同 仁 多 町 郡	奈良時代 ?	須恵器杯 ?	墨 書 「上備」「大」 を同一土器に 記す。	底部外面	『島根の古代』 昭和57年 島根県八雲立つ風土記 の丘
8 大阪府 郡家今城遺跡	平安時代 中期	土師器杯	墨 書 不詳 「吉」「出井」 「豊」ほか	底部外面	『記された世界』 一大阪府下出土の墨書 土器・文字瓦と木簡 展一 昭和59年 大阪府立泉北考古資料 館
9 同 桜 井 谷 窯 跡 群 (緑丘窯跡)	奈良時代 後期	須恵器高 台付杯ほ か	ヘラ描き 不詳 「西」	高台内面	
10 同 長 原 遺 跡	平安時代 中期	黒色土器 椀	墨 書	高台内部	
11 同 佐 堂 遺 跡	鎌倉時代	墨書土器 片	墨 書 「有」「不」「無」 「一不成佛」		
12 同 大 園 遺 跡	奈良時代	須恵器高 台付杯	墨 書	高台内部	
13 京都府 西 桐 窯	本文参照				

遺跡名	時代	器種	出土状態その他	記銘位置	文献
14 同石原畑窯	本文参照				
15 同千代川遺跡	本文参照				
16 同長岡京					
17 奈良県西隆寺		須恵器	「厨」「左衛」ほか	底部外面	42の文献に同じ
18 同平城宮	奈良時代	土師器ほか	墨書 溝状遺構ほか	底部外面ほか	『平城宮出土墨書土器集成1』昭和58年、奈良国立文化財研究所
19 滋賀県今津弘川遺跡	室町時代	白磁皿	墨書	底部外面	『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅷ-3 昭和56年、滋賀県教育委員会 勸滋賀県文化財保護協会
20 同野畑遺跡	奈良時代 平安前期		墨書 「ト田」「日佐」「宅」近江国庁などと何らかの関係をもつ官衙		以下『近江の官衙』—墨書土器と硯— 昭和58年、滋賀県立近江風土記の丘資料館
21 滋賀県下鈎遺跡			墨書		
22 同御館前遺跡			墨書 「西殿」「大」蒲生郡衙?		
23 同軽野廃寺			墨書 「寺」「大」		
24 同畑田廃寺			墨書 「僧寺」「大」「三河」「弥」「稷」		
25 三重県史跡斎宮跡	奈良時代	不詳	ヘラ描き 「水司鴨口」	不詳	『史跡斎宮跡』昭和57年、三重県教育委員会三重県斎宮跡調査事務所
26 同柚井貝塚	須恵質土器			「反」「吉」「福多」「加福」ほか	42の文献に同じ
27 同増の坪					
28 福井県和田遺跡	不詳	須恵器?	墨書 溝状遺構内「田」「西」「黒万呂」「麻呂」など	不詳	『遺跡は語る』—ここ20年間の発掘成果から— 昭和60年、福井県立博物館
29 石川県戸水C遺跡					

	遺跡名	時代	器種		出土状態その他	記銘位置	文献
30	同 長者川D遺跡						『東大寺領横江庄遺跡』 昭和58年，松任市教育 委員会・石川考古学研 究会
31	同 寺家遺跡						
32	岐阜県 南一色						42の文献に同じ
33	長野県 下神・町神遺跡	平安時代 初～中頃	土師器杯	墨書	竪穴式住居跡 内より出土	底部外面	『松本市下神・町神遺 跡』 昭和59年，松本市教育 委員会
34	同 南栗・北栗遺跡	X 期 (平安時 代?)	須恵器杯	墨書	竪穴式住居跡 内より出土	口縁部外 面	『松本市島立南栗・北 栗遺跡高綱中学校遺跡 ・糸里遺跡』 昭和60年，松本市教育 委員会
35	同 下条灰塚遺跡				「田」ほか		『伊場遺跡遺物編2』 昭和55年，浜松市教育 委員会
36	同 小垣外						
37	同 有尾						
38	同 富士里						
39	同 生仁						
40	同 下条灰塚						
41	同 松ノ木						
42	静岡県 伊場遺跡	奈良時代 鎌倉時代	須恵器 ほか	墨書	大溝内 「栗原驛長」 「馬長」「布智 厨」ほか多数	体部外面 ほか	
43	同 城山遺跡	奈良時代 ほか	土師器 ほか	墨書	伊場遺跡の延 長か?	底部	
44	同 長者平遺跡	鎌倉時代 室町時代	陶質土器 杯	墨書		底部	
45	同 道場田遺跡	平安時代	須恵器杯	墨書	井戸内 益津郡小河郷 ないしは小河 駅との関連か ?	底部	

	遺跡名	時代	器種		出土状態その他	記録位置	文献
46	同 永原追分遺跡	平安時代		墨書	「十」「八十」 ほか		
47	同 岡遺跡	平安時代 初頭	土師器	墨書		側面	
48	同 田村						
49	東京都 武蔵国府	奈良時代	須恵器杯	朱書		底部外面	『武蔵国府の調査』XIV 一 国府関連遺跡調査 昭和56年度概報2 昭和57年府中市教育委 員会府中市遺跡調査会
50	千葉県 高野台遺跡	平安時代 ?	土師器杯	ヘラ描き	竪穴式住居内	底部外面	
51	同 村上遺跡			ヘラ描き			『高野台遺跡発掘調査 報告書』 昭和54年、高野台遺跡 調査会 柏市教育委員会
52	同 石神遺跡			ヘラ描き			
53	同 古屋敷遺跡			ヘラ描き			
54	同 込の内						42の文献に同じ
55	同 真間						
56	同 須和田						
57	埼玉県 水深遺跡			墨書, 朱書	竪穴式住居内		
58	群馬県 三ツ木遺跡	平安時代	土師器	墨書	竪穴式住居内		『三ツ木遺跡』 昭和59年、群馬県教育 委員会
59	栃木県 下野国府	奈良時代 ?	土師器	墨書	溝内より出土	口縁部外面	『下野国府跡VI』 昭和60年、栃木県教育 委員会
60	同 さるやま						42の文献に同じ
61	福島県 新開						

	遺跡名	時代	器種	出土状態その他	記銘位置	文献	
62	秋田県 秋田城			墨書	「厨」「真上」 ほか	42の文献に同じ	
63	同 脇本遺跡				「主」「雄」「主 厨」ほか秋田 城との関連		
64	同 藤木						
65	岩手県 熊野堂遺跡	奈良時代 後半～ 平安時代	土師器	墨書	竪穴式住居内	口縁部外 面	『水沢遺跡群範囲確認 調査』 昭和60年、水沢市教育 委員会
66	同 胆沢城						42の文献に同じ

ことはむずかしいが、「大」とヘラ描き、あるいは墨書された土器の多くが宮都・国府・官衙などにその出土例が多いことは認められる。

「大夫カ」を「大夫」と判読すれば、「大夫」の類例として「大夫ノ者以司□？」とヘラ描きされた横瓶の体部片が富山県小杉町「小杉流通業務団地内遺跡群」— No. 16 遺跡、第1号窯灰原内から出土している。また須恵器ではないが、「大」・「夫」とヘラ描きされた平瓦が京都府木津町音如ヶ谷瓦窯から出土している。

「為」については、ヘラ描きあるいは墨書土器を含め、類例がないため、明言できないが、人名あるいは役職名となる可能性がある。

## 8. 石原畑3号窯の歴史的 성격について

石原畑3号窯は、前述のように篠窯跡群の東端に位置し、これまで篠窯跡群で発掘調査された21基の窯のうち、西長尾奥第1窯跡とともに篠窯跡群の草創期に属する窯である。

石原畑3号窯は、出土遺物から8世紀中葉に操業された窯であり、原口正三氏の指摘された須恵器生産における「第三の画期」<sup>(注15)</sup>、中村浩氏の指摘された「第5段階の地方窯」<sup>(注16)</sup>に相当する時期の窯であり、この時期には国府の整備、国分寺の創建などを契機として窯の操業が全国的に行われる時期である。

石原畑3号窯出土遺物の供給先については、各消費地での照合が進んでいないため、どの程度の範囲にまで供給されていたかは不明であるが、管見によると明らかに石原畑3号窯の製品が供給されている遺跡として丹波国分寺がある。丹波国分寺では数次にわたる発掘調査が行われ、そのうち、第3次調査で検出した土坑内より、平安時代前期の須恵器とともに、第2図-5のような口縁部内面に1条の沈線文をめぐらした皿Bが数点出土している。



また推定丹波国府跡として調査が進められている千代川遺跡第6・7次調査<sup>(注18)</sup>では、これまでの調査成果によると石原畑3号窯の遺物は出土していないが、「大」と墨書された土器があるほか、「大夫カ」とヘラ描きされた土器が石原畑3号窯から出土していることにより、今後丹波国府跡で石原畑3号窯の遺物が出土する可能性は大きいと考えられる。

このように石原畑3号窯は丹波国分寺あるいは丹波国府への供給を一つの契機として操業された窯であり、新治郡衙における花見堂窯跡、美濃国における老洞窯などと同じ性格をもった窯であると考えられる。

丹波国分寺・丹波国府の創建あるいは改修を契機として成立した篠窯跡群は、8世紀末～9世紀初頭には長岡京・平安京への一大消費地への供給を目的として、須恵器生産が増加し、11世紀をもって篠窯跡群の終息をむかえる。ただ250年間にわたる篠窯跡群の操業については10世紀を境としてその意味するところは異なるが、その点に関しては機会を改め論述していきたい。

## 9. おわりに

石原畑窯跡の発掘調査は昭和57年度に実施され、昭和59年度に報告書を刊行したが、その段階では紹介できなかったものとして、今回資料紹介したヘラ描き文字・文様の須恵器がある。このヘラ描き文字・文様の須恵器が石原畑3号窯より出土していることは、現地調査の段階で気づいていたが、報告書の原稿提出時には整理作業が進んでいなかったこととともに、ヘラ描き文字のうち、「大」「大夫カ」についての存在意識が少なく、「為」の第一印象が強力であったため、「為」の類例の追求に力点をおき、どうしてもまとめる作業が遅れてしまい、4年の歳月を過ぎた。この間には、報告書の刊行をみたが、まだヘラ描き土器の紹介がおわっていないため石原畑窯跡の報告書はおわっていないという意識があったが、昭和61年6月に石原畑窯跡出土遺物の図面を整理している際、偶然「大夫カ」の拓本が目にとまり、石原畑3号窯と国府との関連が指摘できるのではと考え、「大」のヘラ描き土器とともに墨書土器の類例を追求した。

このヘラ描き文字・文様の資料紹介にあたっては、報告書刊行後も整理作業を指導した水谷寿克氏をはじめ、整理作業を行った藤田順代・大塚弥生・坂本明美・柳本喜美恵・平野仁佳子氏のほか、執筆にあたっては土橋 誠・伊野近富・森下 衛・引原茂治・荒川史・樋口隆久・清水みき氏より有益な助言を得た。記して謝意を表したい。

(石井清司＝当センター調査課調査員)

- 注1 当センター調査員 引原茂治氏の御教示による。
- 注2 中谷雅治・長谷川達・大橋宏記ほか、『西柵窯跡』(『加茂町文化財調査報告』第2集 加茂町教育委員会) 1981
- 注3 岡内三真・宇野隆夫・五十川伸矢ほか『周山麿寺窯址』 京都大学考古学研究室 1982
- 注4 森 浩一・大井邦明・林日佐子ほか『マムシ谷窯址発掘調査報告書』 同志社大学校地学術調査委員会 1983
- 注5 注4に同じ
- 注6 注3に同じ
- 注7 滝口 宏・大川 清「栃木県益子町栗生滝ノ入窯址調査概報」(『古代』19・20合併号) 1956
- 注8 久永春男「記号状刻文について」(『刈谷市の古窯』) 1958
- 注9 中村 浩「須恵器生産に関する一試考—和泉陶邑窯における陶工組織について—」(『考古学雑誌』63-1) 1977
- 注10 亥野 彊ほか『緑丘窯跡』 緑丘団地遺跡調査団 1984  
 緑丘窯跡出土のヘラ描き文字には、「大」「西」などがあり、「大」は13個体を数える。供給先については不明。
- 注11 吉岡康暢「墨書土器」(『東大寺領横江庄遺跡』収録 松任市教育委員会・石川考古学研究会) 1983
- 注12 上原真人「天平12, 13年の瓦工房」(『研究論集』Ⅶ 奈良国立文化財研究所) 1985. 1
- 注13 『小杉流通業務団地内遺跡群』—第6次緊急発掘調査概要 富山県教育委員会 1984
- 注14 岡本東三ほか「音如ヶ谷瓦窯(第9地点)の調査」(『奈良山—Ⅲ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』 京都府教育委員会) 1979
- 注15 原口正三『須恵器』(『日本の原始美術④』 講談社) 1979
- 注16 中村 浩「須恵器生産の諸段階—地方窯成立に関する一試考—」(『考古学雑誌』67-1) 1981
- 注17 亀岡市教育委員会 樋口隆久氏の御好意により、遺物について実見する機会を得た。
- 注18 当センター調査員 森下 衛氏の御教示による。
- 注19 石原畑3号窯出土のヘラ描き文字「大夫カ」を「大夫」と判読すれば、称号として考えることができる。すなわち、関見氏の「大化前後の大夫について」(原島礼二編『大和王権』論集日本歴史Ⅰ収録)の論考によると、大夫は五位以上の地位のものを総称し、「太政官においては、官位相等の場合には大臣と大納言、寮においては太宰師・皇太子傳・八省卿・彈正尹・左右大弁・神祇官・中宮大夫だけであり、司および中国以下においては通常は長官といえども大夫と呼ばれる範囲には入らない」と考えられている。この論考にしたがえば、「大夫」と呼称されるべき人物は五位以上の官僚に限定できる。この場合、丹波国府との関連で考えれば、律令の規定では丹波国は上国であり、丹波国の長官が「大夫」と呼称されても誤まりのない役職である。

## 昭和61年度発掘調査略報

### 1. 正 垣 遺 跡

所在地 中郡大宮町奥大野  
調査期間 昭和61年4月14日～7月3日  
調査面積 約2,300㎡

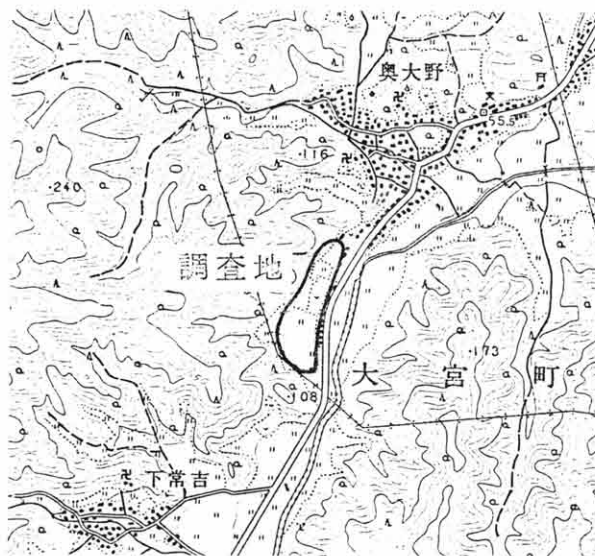
はじめに 今回の発掘調査は、府営ほ場整備事業に伴う事前調査であり、前年度に引き続いて実施した<sup>(注1)</sup>。今年度調査は、第1トレンチの調査であったが、工事に伴って古墳1基と建物に伴う柱穴群を確認したことから、新たに2か所においても調査を実施した。

#### 調査成果

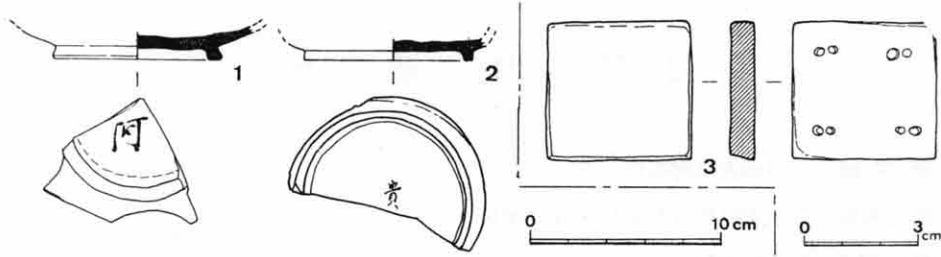
第1トレンチ 調査予定地の北東端水田部に設定したトレンチである。調査地内からは7棟の掘立柱建物跡を検出した。掘立柱建物跡のうち、3棟は2間×2間の規模をもつ総柱建物であった。残る4棟の掘立柱建物のうち全様が判明した2棟は2間×4間の規模をもつ。調査地外に建物がのび、規模不明な建物2棟のうち1棟は東西棟の南側に廂をもっている。この建物群はほぼ3時期に分かれ、奈良時代後期～平安時代前期・平安時代中期・平安時代後期～鎌倉時代初頭に位置づけられる。

第4トレンチ 立会調査中に実施した畑地部分の調査地である。直径約14mの円墳1基を検出した。円墳は東半分が中世段階に大きく破壊され、墳丘中央で木棺直葬の埋葬主体部の一部を検出したほか、墳丘西部で幅約2mの周溝を検出した。出土遺物から6世紀前半に比定できる。

第5トレンチ 第1トレンチを南に拡張した調査地



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



第2図 出土遺物実測図

1・2. 墨書土器 3. 石帯

である。調査地内から4棟の掘立柱建物跡を検出したほか、柵列・土壇・河川跡を検出した。各遺構は第1トレンチで検出した建物群の時期に含まれる。

**出土遺物** 今回調査を実施した3か所のトレンチ内から、古墳時代後期～鎌倉時代に属する遺物が多量に出土した。なかでも奈良時代～平安時代に属する遺物が大部分を占める。出土遺物の大部分を占める土器のうち、杯・蓋・碗・皿等の供膳具が比較的多量に出土している。また、緑釉・灰釉・青磁・白磁等の施釉陶磁器も数多く出土している。その他、柱穴に伴う木製柱根(直径約25～40cm)・板材・用途不明品等の木製品も多数出土した。また、第2図にみられる「阿」・「貴」と墨書された杯や、石帯(巡方)等のほか杯や蓋を硯に利用した転用硯も多数出土している。

**まとめ** 正垣遺跡の調査では数多くの成果を得た。なかでも奈良時代～平安時代における建物群の検出は、古代の丹後を考える上で貴重な資料となる。3時期に分かれる建物群のうち、奈良時代～平安時代中期に属する建物の柱穴掘形はすべて方形プランであり、一辺約50cm前後の規模をもつ例が多いが、中には1mに近い例も認められる。柱穴間心距離は約2.1～2.4mを示す例が多い。建物群の配置状況は、南北方向に狭く長い台地上の立地から、地形による規制を受けたとみられる。建物の主軸は南北方向に向ける例が多い。未発掘部分を多く残していることから、正垣遺跡の全様を把握することは不可能であるが、建物群は数か所に密集してくる傾向が認められ、各時期における建物群はその主軸をほぼ同じに統一される傾向がうかがわれる。

掘立柱建物群に代表される各種遺構のほか、施釉陶磁器・墨書土器・硯・石帯等、一般集落の調査では出土例が少ない各種遺物が豊富に出土したことから、正垣遺跡は古代における役所的な性格をもつ集落とみることができよう。「正垣」・「倉垣」等、役所の施設を表わす地名も残ることから、役所の施設が存在したことは十分予想される。古代における当地域は丹後国丹波郡大野郷に比定されている。(竹原 一彦)

注1 竹原一彦「正垣遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第20号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

## 2. 谷 内 遺 跡

**所在地** 中郡大宮町谷内  
**調査期間** 昭和61年5月8日～6月26日  
**調査面積** 約200m<sup>2</sup>

**はじめに** 今回の調査は、昭和61年度京都府宮ほ場整備事業(大宮地区・谷内工区)に伴い実施したものである。当地は、竹野川右岸の低位丘陵間に形成された小さな谷部にある。地形的には扇状地状であって、徐々に下がって竹野川により形成された平野部に達する。

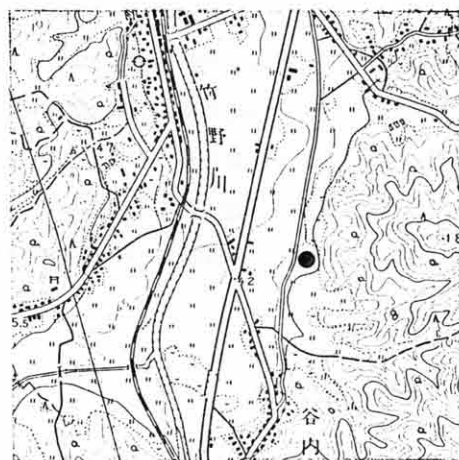
周辺には、裏陰遺跡・正垣遺跡がある。

**調査概要** 調査は、対象地内にトレンチを設定して行った。調査の結果、扇状地状であったため複雑な土層堆積をしていたが、自然流路が3条存在することが判明した。

**自然流路NR01** 幅約1.5m・深さ約0.5mを測る自然流路である。南東から北西へ向かって流れていたことが判明した。流路内より、弥生時代後期～古墳時代初めの多量の土器が出土した。また、十数点の木製品や管玉も出土したが、その中には木製穂積み具が1点含まれており注目される。加えて、稲粃等と考えられる植物遺体が幅約1.5m・長さ約3mの範囲で堆積していたが、これらは当時の環境を考える上で、非常に貴重な資料である。

**自然流路NR02** NR02は、古いものと新しいものが重なって2条ある。新しいものは、幅約0.5mを測る。流路内には、粗い砂のみが堆積していたが、このことからこの流路が比較的短時間に埋まったものと推察できる。古いものは、幅約6m前後の自然流路である。流路内からは、自然木をはじめ、縄文土器、弥生土器が数点出土した。2条とも東から西へ流れていったものである。

**まとめ** 今回の調査では、住居跡等集落に直接かかわる遺構は検出できなかったが、自然流路を3条検出した。弥生時代後期～古墳時代初めにかけての豊富な出土遺物などから考えて、近隣にこの時代の集落跡が存在することは確実であるといえよう。加えて、NR01からは縄文土器が出土しており、この時代に集落が予想される。



第1図 調査地位位置図 (1/25,000)



第2図 出土遺物実測図

(藤原敏晃)

### 3. 長岡宮跡 第172次

**所在地** 向日市上植野町上川原5番地  
**調査期間** 昭和61年4月17日～6月21日  
**調査面積** 約400m<sup>2</sup>

はじめに 調査地は、長岡宮跡の西方官衙南半部にあたり、周辺には「馬立」「島坂」「滝ノ町」等の地名が残り、各々、右馬寮、島院を想起することができる。また、この地域は昭和55年度(京都府教育委員会)の調査によって、小畑川旧河道のうち幾条かが明らかになり、字名の「上川原」もそのような旧流路を推察させるにふさわしい地名である。

**調査内容** 調査の結果、長岡宮に関する遺構は検出されなかったが、旧河道(旧小畑川)をトレンチ全域で確認した。A地区では、旧河道と同一方向で自然木が出土した。

全般的な土層の順序は、耕作土・床土・灰色砂礫・黄褐色砂礫・青灰色粘土である。この灰色砂礫と黄褐色砂礫は、旧河道の堆積物であり、前者は3cmほどの一定した小礫群で、後者は砂・小礫・大礫からなっている。青灰色粘土は大阪層群に属し、地山である。

旧河道は、調査地全域を占める。本流の川幅はわからなかったが、砂礫の長軸方向や河床面の方向等から、主に北西から南東方向に流れていたものと推察される。河床には、激しく流入した砂礫によって大きな凹凸がみられた。A地区から出土した自然木は、南東方向に向いており、長さ13.5m・直径0.4m、表皮は部分的に残っていたが空洞化していた。

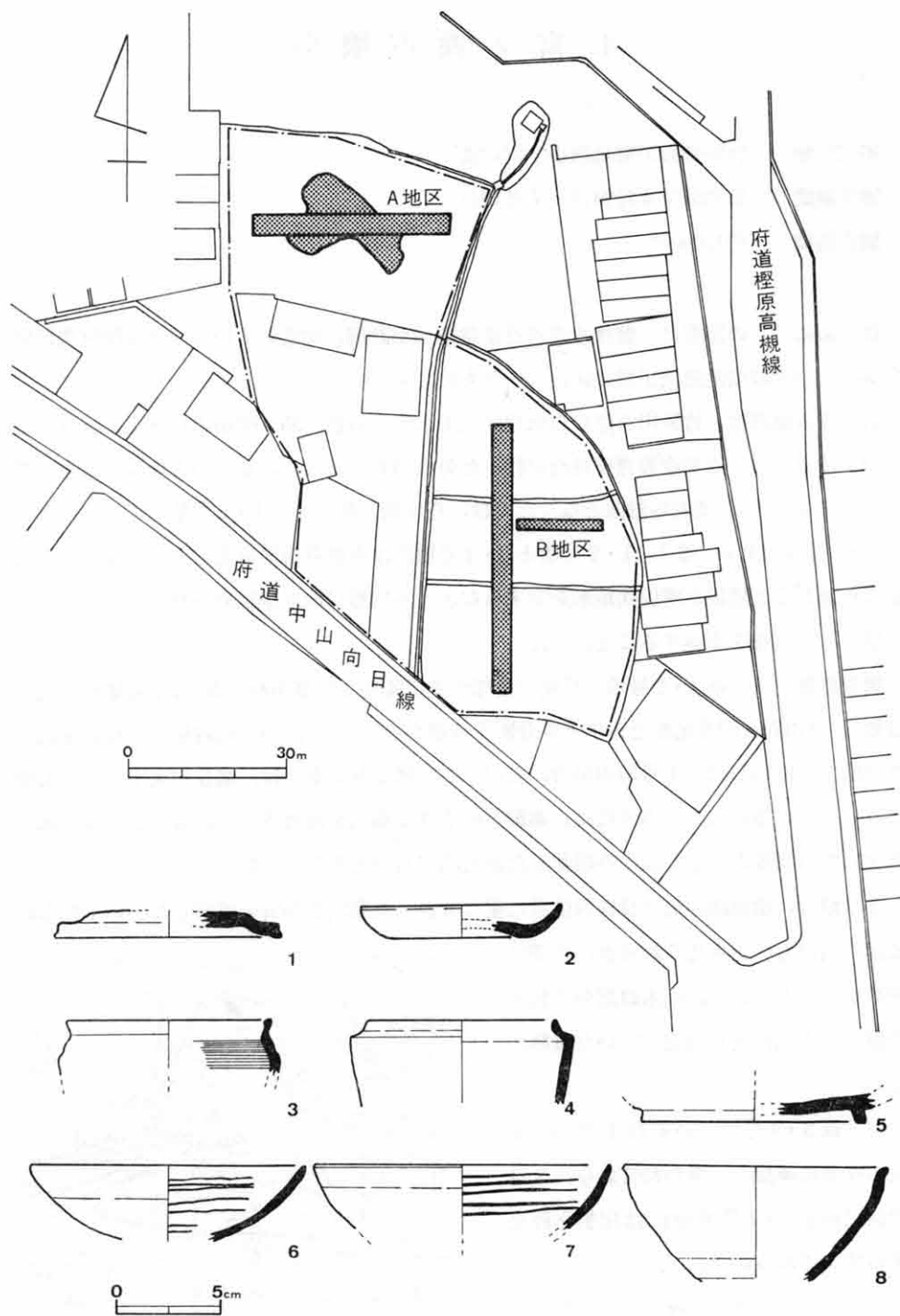
出土遺物は、土師器・須恵器・瓦・瓦器等で、摩滅した細片が多い。(8)は耕作土から出土した16世紀の天目茶碗で、(2・6・7)は14世紀前半の瓦器である。(1・3・4・5)は奈良・平安時代の蓋・甕・壺・杯である。(8)を除いてすべて旧河道から出土した。

**まとめ** 今回の調査で旧小畑川の様相が、わずかながら明らかになった。向日丘陵の最南端の西側に沿って北西から南東に流れ、鎌倉時代末期頃に埋没したものと考えられる。それ以前の長岡京期にはどのような状態であったかは、明確にできなかったが、流れが激しく、暴れ川であったと考えられている。

(竹井 治雄)



第1図 調査地位置図 (1/50,000)



第2図 調査地位位置図及び出土遺物実測図



## 4. 宮ノ森古墳群

**所在地** 竹野郡弥栄町鳥取小字宮の森  
**調査期間** 昭和61年4月24日～7月19日  
**調査面積** 約1,000m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、農林水産省近畿農政局が計画、推進している「丹後国営農地開発事業」の鳥取団地造成工事に伴い行ったものである。

宮の森古墳群は、竹野川右岸の鳥取地区北方に広がる標高55～65mの丘陵上に位置する。この丘陵上には、京都府教育委員会の行った分布調査によると、8基の古墳が確認されている。このうち、調査の対象となったのは、丘陵最北端にある1・2号墳と中央に位置する3・4号墳である。また、1・2号墳と3・4号墳間は古墳空白地帯となっていたり、主尾根より延びる支尾根が階段状地形を呈するなど、不自然な地形が認められたため、試掘対象地として調査を実施することとした。

**調査概要** 宮の森1・2号墳 丘陵の稜部中央に隣接して築かれており、1号墳南西側には墳丘の1/3程を回る尾根と古墳とを分断する溝が設けられている。両古墳とも埋葬施設は2か所ずつ検出した。1号墳の場合、その中心主体となるものは、墳丘中央よりやや南側に寄った所に認められ、中央には、素掘りの小さな墓塚が検出された。この小さな墓塚は、出土した遺物等から副葬品のみ埋葬した副室的なものとも考えられよう。

2号墳は、墳頂部中央ではほぼ同位置に重なり合った墓塚2か所を確認した。いずれもほぼ同時期のものと考えられるが、初期に埋葬されたものには、両木口部分を粘土を混ぜた土塊により固定していた痕跡が認められた。

宮の森3・4号墳 いずれも狭小な尾根の稜部に隣接して築かれており、3号墳は尾根と3・4号墳間には尾根と直交する溝が認められた。

3号墳では、埋葬施設は3か所検出した。いずれも尾根に直交する長大な墓塚で、地山を二段に掘り込んだ二段墓塚を



調査地位置図 (1/50,000)

調査古墳規模一覧表

	1号墳	2号墳	3号墳	4号墳
墳形	円形	円形	長方形	円形
規模	9m	8m	13m×11m	17m
高さ	1.3m	1m	1.3m	1.6m
時期	6世紀前半	6世紀中頃	5世紀	5世紀

呈するものと、素掘りのものがある。二段墓壇をなすもので最も大きい主体部の場合、両木口穴以外に、中央にも木口状の凹みがあり、棺内を2分していた。2分された木口間の長さ約2mではほぼ等分される。素掘りのものでは、木口穴が1か所認められ、反対外に相当する部分では、墓壇を掘った際に一段段差をつけ木口部分の固定を行っていたようである。

4号墳は、墳頂部中央で中心主体となる尾根に直交する長大な墓壇を検出したが、造成予定地外にも、埋葬施設が存在するようで、2か所の主体部の一部のみを確認した。いずれもその大半が造成予定地外になり規模等は不明であるが、方向としては、1か所は、尾根に平行し、残りの1か所は、第1主体部に平行するようである。

各古墳より出土した遺物は、1号墳 須恵器杯身・杯蓋・土師器高杯・鉄鏃・刀子・管玉・紡錘車、2号墳 須恵器杯身・杯蓋・鉄刀・刀子・鉄鏃、3号墳 刀子・鉄鏃・鉈、4号墳 土師器甕片・鉄剣、などが出土した。

まとめ 宮の森古墳群では、4基の古墳を調査し、8か所の埋葬施設を検出した。1号墳は、出土した遺物から6世紀前半、2号墳は6世紀後半頃に築造されたものと考えられるが、3・4号墳については、その時期を明確にする遺物が認められなかったが、墳丘・主体部の規模や、主体部に伴う遺物が乏しいことなどからすると5世紀代に築造されたものと考えられよう。

検出した埋葬施設は、築造時期により形状、規模に多少差異が認められる。いずれの埋葬施設にも、組合式木棺が埋納されていたと思われるが、1・2号墳では、木口部分の固定がなされているものといえないもの、3・4号墳では、長大な墓壇という点では共通性があるが、木口穴の存在するものといえないものがあることなどがあげられよう。

古墳の築造方法についても、1・2号墳では、墳丘基底部のみ地山整形し、墳丘の大半を盛土により形成しているのに対し、3・4号墳では、地山を削り出し、尾根と古墳を分断する溝を設けただけのもので、盛土はほとんどなく、地山整形のみで墳丘が築造されていた。

(増田 孝彦)

## 5. 篠・掛ヶ谷窯跡

所在地 亀岡市篠町  
 調査期間 昭和61年4月24日～6月19日  
 調査面積 約150m<sup>2</sup>

はじめに 篠窯跡群は、亀岡盆地東南部の丘陵斜面に位置する。老ノ坂亀岡バイパス建設工事に伴って、昭和51年度より発掘調査を行ってきた。これらの調査結果から、篠窯跡群は総数100基以上からなり、登り窯や小型窯(三角窯等)で構成されていることがわかった。これらの窯跡の時期は、奈良時代後半から平安時代後半にかけてである。

これらの窯跡の調査時に、直径1m前後を測り、周囲に焼土が巡る円形焼土壇が見つかった。今回の調査地においても円形焼土壇を1基発見した。

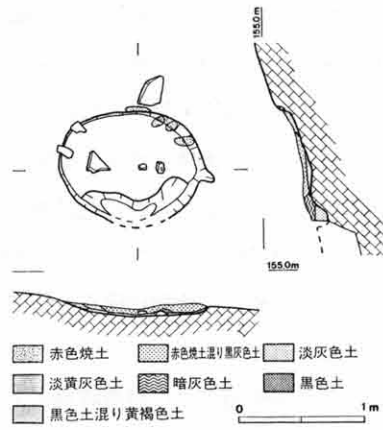
調査概要 昭和59年度に掛ヶ谷地区の田畑部を試掘調査した際に、須恵器片を多数採集したため、今年度はその山手の試掘調査を行い、窯跡の確認を行うこととなった。1つの谷筋を挟んだ両丘陵斜面に試掘トレンチを設定し試掘した。登り窯は存在しなかったが、東側丘陵斜面より第2図のような円形焼土壇を発見した。

規模は、南北1.2m・東西0.9mで、床面は約18度の傾斜を測り、焼土壇で最も低い東側を楕円状に約10cm掘り込まれていた。土壇内に遺物はなかった。

まとめ 円形焼土壇は、小柳窯跡群、黒岩作業場跡と西長尾A地区作業場跡で検出されているが、このような土壇がどのような性格のものであるか不明である。今回の調査地から検出した円形焼土壇は、単独で検出され、土壇に伴う遺物の出土が見られなかったことから、時代・性格ともに不明であり、今後の調査に期待したい。(岡崎 研一)



第1図 調査地位置図



第2図 円形焼土壇実測図

## 資料紹介

## 石本遺跡出土の渦巻文のある弥生土器について

田代弘

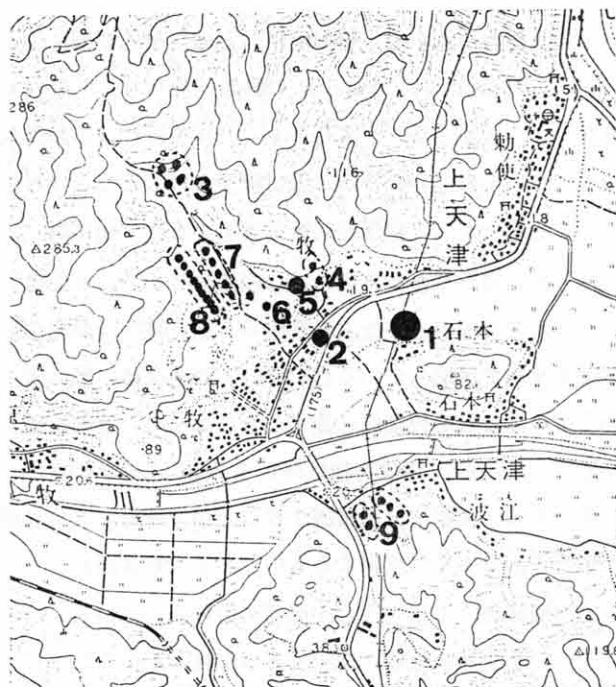
## 1. はじめに

前号では、綾部市青野西遺跡から出土した渦巻文のある土器を紹介し、<sup>(注1)</sup> 施文方法を中心に気づいた点について述べた。これに類する資料を周辺地域で探していたところ、同じ由良川水系沿いにある石本遺跡からも同様の文様をもつ土器が出土していることがわかった。<sup>(注2)</sup> 石本遺跡出土遺物は、現在、報告書作成のための整理をおこなっている最中で、この遺物については未だ報告するに至っていない。そこで、小稿では渦巻文の新出資料としてこれを取り上げ、紹介しておくことにしたい。

## 2. 遺跡と遺物

石本遺跡は、福知山市大字牧から石本にかけて所在する複合遺跡である。宮福線敷設工事に先立つ発掘調査により、その存在が知られるようになった。<sup>(注3)</sup> 遺跡は、牧川と由良川の合流する付近に位置し、由良川にそって走る主要な交通路と但馬方面を結ぶ交通の要衝にあっている。この場所は、周辺に数多くの遺跡が知られており、歴史的にも重要な位置を占めていたことがわかる(第1図)。

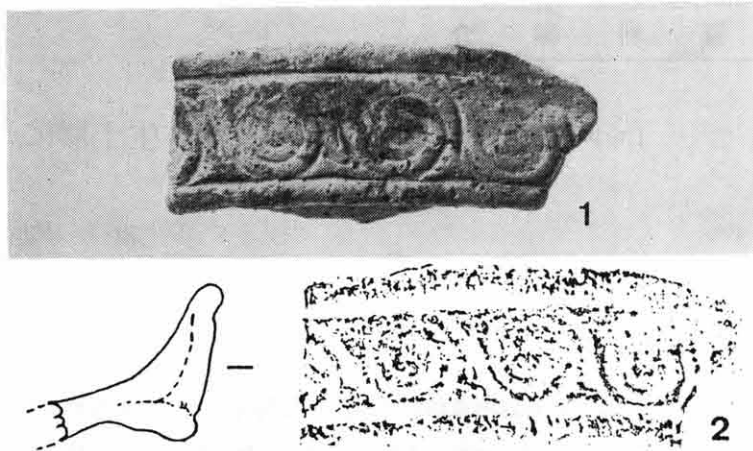
調査の結果、弥生時代中



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

- |           |           |          |
|-----------|-----------|----------|
| 1. 石本遺跡   | 2. 牧正一古墳  | 3. 平石古墳群 |
| 4. 岩田古墳群  | 5. 麩師遺跡   | 6. 弁財古墳  |
| 7. 道勘山古墳群 | 8. 槌ノ口古墳群 | 9. 波江古墳群 |

期の方形周溝墓  
・溝・土塚，弥  
生時代後期の堅  
穴住居跡，古墳  
時代後期の堅穴  
住居跡・溝・土  
塚など多くの遺  
構が検出された。  
各遺構に伴って  
遺物も多量に出  
土している。な



第2図 遺物写真(1)と実測図(2) (実大)

かでも，A地点の古墳時代後期の溝には木製品が数多く含まれており，漆塗りの靴や祭祀具とみられるもの等類例の少ない貴重な遺物もあった。<sup>(注4)</sup>

包含層からもたくさんの土器が出土しているが，今回報告する資料もそのうちの一つである。以下，この遺物について観察結果を記すことにしたい。

この土器は，流水や土層の攪乱などの二次的要因によって細片化が進み，現在では5×3cmほどの破片になっている。口縁の一部だけであるので，全形を明らかにすることはできないが，後述するような特徴から高杯や器台などの供献形態をとる器種が考えられる。時期については，いわゆる二重口縁をもつことや包含層に含まれる土器の多くが擬凹線をもつことなどから，弥生時代後期後半から終末期に属するものと考えている。<sup>(注5)</sup>

受け部はゆるやかに外反し，口縁部に至る。口縁部は二重口縁状を呈し，端面を主に上方へ拡張して幅のある施文帯を作る。施文帯には渦卷文を幅いっぱい施し，その後上下端を沈線で区切っている(第2図)。渦卷文は，時計回りに巻き込んで反転する単位文様からなり，これを規則的に施すことによって，連続渦卷文Z型第Ⅱ種と同様の視覚的效果を意図している。単位文様は径が1.7cmほどのもので，渦の中心はとぎれずに連続する特徴がある。4単位分を確認することができた。これは前回報告した青野遺跡から出土したものと同一タイプに属するものである(第3図)。

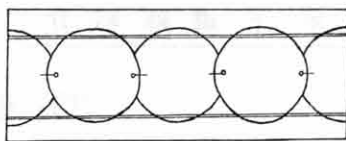
施文原体は，文様どうしが面的に切り合っていることや，施文後の状態が押圧特有の平坦な形状をなしていることなどから，「スタンプ」状のものを用いたと考えて誤りない。渦卷きの形はそれぞれほぼ同じ形と大きさであるので，原体は一つであり，これ



第3図 渦卷文の形状 (実大)  
1. 青野遺跡 2. 石本遺跡

を反復して用いたようである。

第4図は、文様がお互いに切り合っている様子を概念的に示したものである。この土器においては、等間隔に文様を配した後に、間を埋めるようにして文様を充填するというパターンを推定することができる。



第4図 文様の切り合い関係(概念図)

なお、胎土には、緻密な粘土素地を用いている。粘土中には、長石や石英粒のほか、チャート粒や各種の岩石が認められる。粒径は、1mmに満たないものが多いが、なかには3mmを越えるものもある。岩石類には円礫化したものが多い。花崗岩の風化土壌が再堆積したものを主体的に用い、これに砂粒を混入したものである。これは、石本遺跡から出土した土器全般に共通する特徴であるから、当該土器は、集落内あるいは近傍で作られたものと解することができる。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

### 3. おわりに

以上、遺跡と遺物について簡単に紹介した。次に、気づいた点を記し、まとめにかえることにしたい。

(1) 当例は、弥生時代後期後葉から末葉に属するもので、帰属時期をある程度限定できる資料としては当地域では初めてのものである。文様は、スタンプによる渦巻文を連続して施し連続渦巻文とするもので、単位となる文様は銅鐸や銅剣に連続させて用いられるものと同様の形状を呈していた<sup>(注6)</sup>。今回の発見は、青野遺跡例と合わせ、この種の文様の分布地図をさらに拡大するものとなった。

(2) 当例は、由良川水系では青野遺跡に次いで2例目の発見となった。これらは、どちらも小さくなった破片で、よほど注意しておかないと見過ごしてしまいそうなものである。この種の文様のある土器は特殊な場合に用いられることが多かったためか、発見例に乏しく、器種構成に占める割合が大変小さい。また、見つかった時には細片になっており攪乱を受けて包含層などから見つかることが多いので、確認するのが容易ではない。整理作業を進めるにあたってはこの点について特に留意しておく必要がある。今後の資料の増加が期待されるところである。(田代 弘=当センター調査課調査員)

注1 田代 弘「青野遺跡出土の渦巻文のある土器」(『京都府埋蔵文化財情報』第20号) 1986

注2 当センター辻本和美主任調査員の教示による。

注3 辻本和美「福知山市石本遺跡の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第14号) 1984

注4 竹原一彦「石本遺跡出土の木製遺物」(『京都府埋蔵文化財情報』第14号) 1984

注5 『裏陰遺跡発掘調査概報』大宮町教育委員会 1979

注6 今里幾次「播磨弥生式土器の動態」(『考古学研究』16-1)

『瓜破北遺跡』(財)大阪市文化財協会 1980.3

府下遺跡紹介

33. <sup>ひじりづか</sup>聖塚古墳・<sup>あやめづか</sup>菖蒲塚古墳

聖塚古墳と菖蒲塚古墳は、綾部市多田町にあって、約120mほど離れて立地している。いずれも方墳で、古くから「多田古墳群」の名称で呼ばれている。立地の面からみれば、東西約1.0m・南北約1.3mの小さな盆地のなかにある。

これらの古墳の本格的な調査は、大正の終わり頃、梅原末治の手により行われた。それによれば、聖塚は、二段築成の方墳で、一段目の一辺約42.9~44.9m・高さ1.5mで、二段目が一辺約33m・高さ4.5mを測る。しかも、北西がやや狭い台形状を呈している。外表施設として葺石を持ち、一段目と二段目に円筒埴輪がめぐっていた。内部施設は、明治24年の発掘調査ですでに崩壊していて、構造が明らかではなかったらしい。ただ、明治の調査の出土遺物として、鏡片・冑残片・短甲残片・玉類などが残されていた。時期は、出土遺物から5世紀前半~中頃に比定されている。

一方、菖蒲塚古墳の方は、裾部が削平されているため、詳しくは不明であるが、聖塚と同じく二段築成の方墳であるらしい。規模も、一辺約21.6~23.4m・高さ約4.5mを測り、聖塚よりもやや小さい。円筒埴輪が東辺と西辺の崖面にたくさん露出していたことから、一段目と二段目の接するところにめぐらせていたようである。時期は、やはり出土遺物から4世紀後半~5世紀前半に比定されている。

このような状況であった二つの古墳もこの周辺の田地が昭和57年度には場整備事業の対象になったため、翌58年度に発掘調査が行われた。調査対象地は、墳丘の裾部であるが、次のような注目すべき結果を得ている。聖塚古墳には南辺中央部に東西幅約17.5m・長さ約4.6mの造り出しのあったことが判明した。この造り出し部の上面からは、円筒埴輪のほか、蓋や短甲等の器材埴輪の破片が出土し



第1図 遺跡所在地 (1/50,000)





第2図 聖塚古墳・菖蒲塚古墳平面図  
 (『聖塚古墳・菖蒲塚試掘調査概報』より転載)

た。周濠もみつきり、12~13mの幅をもつもので、周濠の水田化は、周濠内出土遺物から13世紀からと考えられる。規模も一回り大きく、一辺約54.2mの方墳であったことが判明した。

また、菖蒲塚古墳では「二重造り出し」ともいうべき葺石がみついている。ただ、全体を確認したわけではないため、現段階では東側が二重になり、西側は一重のまま墳丘に取り付くと推定されている。これは、先端部幅約17m、墳丘部から約6mも突出することが明らかになった。菖蒲塚周辺に設定した各トレンチからは埴輪片のほか瓦器などの中世の遺物も出土している。周濠は、幅3~5mで、外には外堤状施設が確認されている。こちらも、規模が一回り大きく、一辺約32.3mの方墳であることがわかった。

このように、近年の発掘調査によってこれらの方墳には前方後円墳のように造り出しを持つことが明らかにされた。特に、菖蒲塚の二重に見えるものは、その性格も含めて究明されるべき性質のものである。

(土橋 誠)

<参考文献>

- 梅原末治「丹波国何鹿郡多田の方形墳」『考古学雑誌』 8-4  
 梅原末治「多田村の方墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第一冊 1919  
 『聖塚・菖蒲塚試掘調査概報』(綾部市文化財調査報告 第11集 綾部市教育委員会) 1984



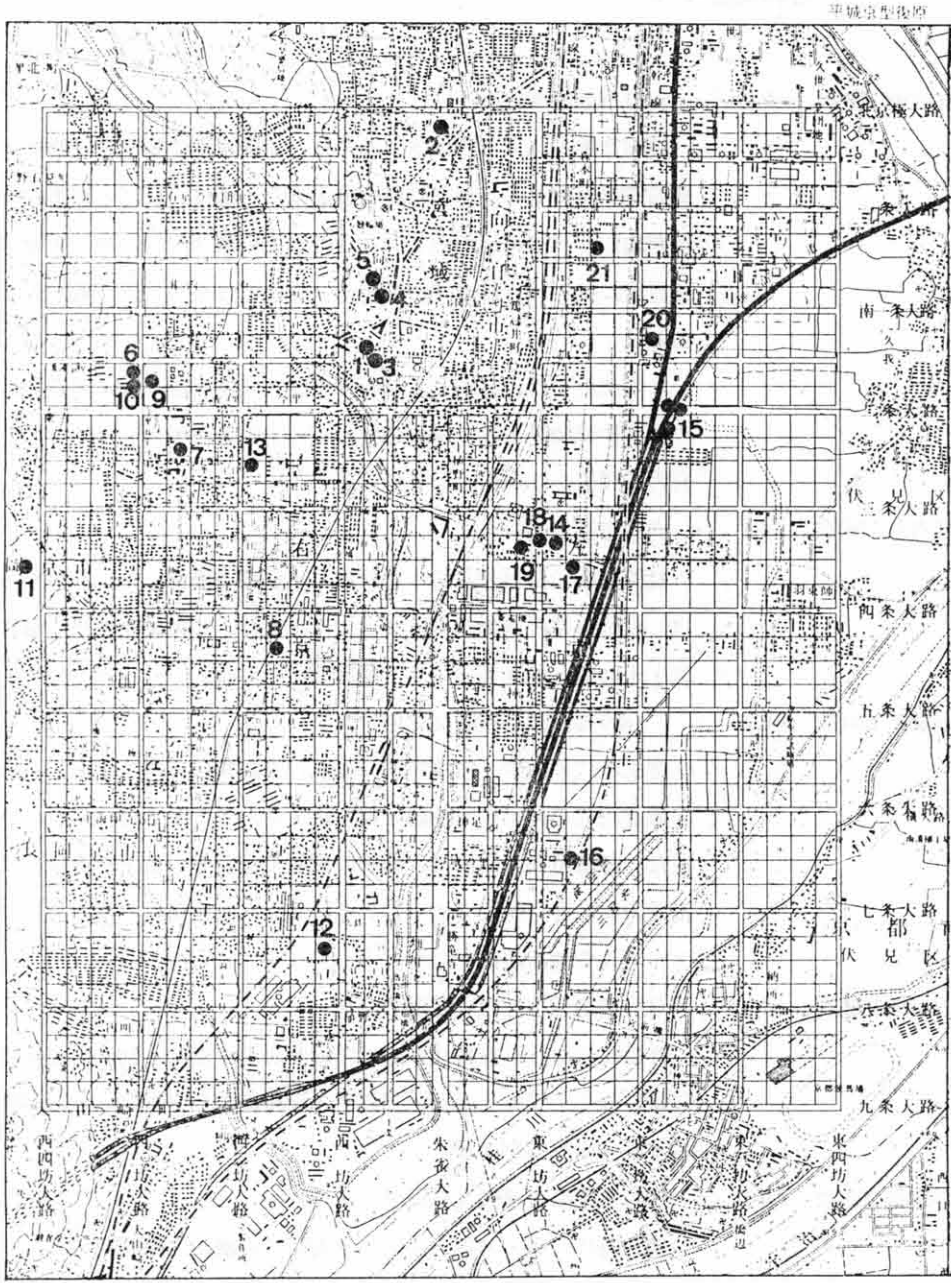
## 長岡京跡調査だより

暑い夏もようやく過ぎ去り、秋の気配が日毎に近づいてきています。梅雨の雨にたたられた6月、そして暑さ厳しい7・8月の3か月、やはり多くの調査が行われています。この3か月間に実施された長岡京跡の調査は、宮域5件・右京域8件・左京域8件の計21件ありました。これらの調査では、長岡京の条坊側溝や長岡京期の建物跡、縄文時代の堅穴式住居跡等を検出するなど、多大な成果が上げられています。また、長岡京跡のほか、向日市西ノ岡遺跡や大山崎町鳥居前古墳の調査も行われ、それぞれ成果を上げています。

調査地一覧表

	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第172次	7AN20C	向日市上植野町上河原5	(財)京都府埋	61. 4. 21～ 6. 19
2	宮内第176次	7AN11H	向日市寺戸町初田14	向日市教委	61. 5. 21～ 7. 31
3	宮内第177次	7AN20D	向日市上植野町上河原7-1	向日市教委	61. 6. 10～ 6. 26
4	宮内第178次	7AN19E	向日市向日町南山3-1	向日市教委	61. 7. 11～ 8. 30
5	宮内第179次	7AN18C	向日市向日町北山65	向日市教委	61. 8. 21～ 8. 28
6	右京第230次	7ANGYT-2	長岡京市井ノ内横ヶ端13-1	長岡京市教委	61. 4. 22～ 6. 4
7	右京第232次	7ANIKU-3	長岡京市今里5丁目14-1	(財)長岡京市埋	61. 6. 2～ 8. 5
8	右京第233次	7ANKSN-4	長岡京市開田1丁目448-5	(財)長岡京市埋	61. 6. 4～ 7. 2
9	右京第235次	7ANGYT-3	長岡京市井ノ内横ヶ端1-1	(財)長岡京市埋	61. 6. 11～ 9. 2
10	右京第236次	7ANGYT-4	長岡京市井ノ内横ヶ端12-4	(財)長岡京市埋	61. 6. 25～ 9. 1
11	右京第237次	7ANJNN	長岡京市長法寺谷山地内	(財)長岡京市埋	61. 7. 7～
12	右京第238次	7ANQNY	長岡京市久貝1丁目18-1他	(財)長岡京市埋	61. 7. 19～ 8. 12
13	右京第239次	7ANIKC-4	長岡京市今里北ノ町1-5	(財)長岡京市埋	61. 8. 18～
14	左京第149次	7ANFKW-2	向日市上植野町桑原	向日市教委	61. 4. 1～ 6. 30
15	左京第151次	7ANEKZ-6	向日市鶏冠井町清水	(財)京都府埋	61. 4. 30～ 8. 16
16	左京第152次	7ANEKR	長岡京市神足芦原16-1	(財)長岡京市埋	61. 7. 11～ 7. 31
17	左京第153次	7ANFKW-3	向日市上植野町桑原10-1	向日市教委	61. 7. 28～ 8. 13
18	左京第154次	7ANFHM-4	向日市上植野町樋爪	向日市教委	61. 7. 30～ 8. 31
19	左京第155次	7ANFBD	向日市上植野町伴田	向日市教委	61. 8. 20～
20	左京第156次	7ANEIS-2	向日市鶏冠井町石橋	向日市教委	61. 8. 12～
21	左京第157次	7ANDKG-4	向日市森本町小柳	向日市教委	61. 8. 26～

# 長岡京条坊復原図



調査地位置図

それでは以下に、6・7・8月の長岡京連絡協議会で報告された調査のうち、主だったものについて、簡単に紹介いたします。

- |                |  |
|----------------|--|
| 宮内第 176 次 (2)  | 向日市教育委員会<br>長岡宮跡の北辺官衙地区にあたり、長岡京期の掘立柱建物跡・柵列等を検出した。掘立柱建物跡のうち1棟は、柱穴の掘形の一边が約1.2~1.5mを測る2間×3間以上の東西棟で、柱間距離は梁行約2.4m、桁行約2.7mを測る。柱穴にはすべて抜き取り痕がある。<br>この調査では、ほかに古墳時代の竪穴式住居跡3基、平安時代の掘立柱建物跡1棟、鎌倉時代のピット群等を検出した。また、有舌尖頭器が1点出土している。 |
| 宮内第 178 次 (4)  | 向日市教育委員会<br>長岡京期の井戸や石組の東西溝・土壇等を検出した。井戸からは、長岡京期の遺物がまとまって出土した。この調査では、須恵器・土師器・軒瓦等のほか、鴟尾が出土した。   |
| 右京第 230 次 (6)  | (財)長岡京市埋蔵文化財センター<br>弥生時代の溝や、古墳時代の土壇、奈良時代の溝・土壇、平安・鎌倉時代の掘立柱建物跡・柵列跡・井戸・ピット群等が検出された。鎌倉時代の井戸は、曲物の側板や底板等の転用材を使って南北方向に井戸側板を作っている。また、奈良時代の溝からは、フイゴ片や鉄滓が出土した。   |
| 右京第 232 次 (7)  | (財)長岡京市埋蔵文化財センター<br>弥生時代から平安時代にかけての旧河道を検出した。出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器(火舎ほか)・灰釉陶器・瓦・土馬等がある。  |
| 右京第 235 次 (9)  | (財)長岡京市埋蔵文化財センター<br>鎌倉時代の溝・井戸・土壇、平安時代の溝、古墳時代の竪穴式住居跡、縄文時代後期の竪穴式住居跡等が検出された。縄文時代の住居跡は、径約4mを測る円形の住居跡で、中央に炉と思われる焼土壇がある。   |
| 右京第 236 次 (10) | (財)長岡京市埋蔵文化財センター   |

右京第 230 次調査地の南隣地である。弥生時代の竪穴式住居跡や土坑、古墳時代の土坑・溝、長岡京期の井戸等が検出された。井戸は、下半部が石組みで、最下部に曲物を据えていた。また、途中に段をもうけ、その四隅に柱穴が穿たれていることから、上半部は木製の井戸側板が存在したと推定されている。この井戸からは、墨書土器、墨書人面土器、神功開寶等が出土している。

その他この調査では、弥生時代の磨製石斧、古墳時代の石製紡錘車等も出土した。

右京第 237 次 (11)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は、長岡京西側の縁辺地にあたる丘陵上に位置する。調査地からは、向日丘陵や伏見丘陵、また遙か南山城一帯が遠望できる。現在、弥生時代後期の竪穴式住居跡が検出されている。調査地の眼下には、弥生時代の竪穴式住居跡や溝が検出された右京第 228 次調査地が位置している。

右京第 239 次 (13)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

中世の溝や礫敷き・土坑等が検出されている。

左京第 149 次 (14)

向日市教育委員会

中世の曲物井戸・土坑・溝、古墳時代前期の方形周溝墓・溝等が検出された。また、古墳時代後期の自然流路や長岡京期から中世にかけての旧小畑川と思われる河川跡等も検出されている。検出された曲物井戸は計 3 基である。

左京第 151 次 (15)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

長岡京の二条大路南北両側溝や三条第 1 小路南北両側溝・東三坊第 1 小路西側溝、長岡京期の掘立柱建物跡や柵列、古墳時代の水田跡と足跡、弥生時代の土坑・溝等を検出した。このうち、長岡京期の掘立柱建物跡の柱穴からは、「越前国大野郡」と記載された木簡が出土した。また、弥生時代の土坑からは、碧玉製管玉の未製品が出土した。そのほか、土師器・須恵器・緑釉陶器・弥生土器等が出土している。なお木簡は、大野郡以下にまだ数文字記されているのが認められる。

左京第 152 次 (16)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京跡の左京七条二坊六町の推定地に当る。遺構としては、

- 左京第 153 次 (17) 向日市教育委員会  
長岡京期の柱穴を東西 2 間分検出したほか、古墳時代の自然流  
路が検出された。遺物としては、須恵器や布留式の土師器等が出  
土している。
- 左京第 154 次 (18) 向日市教育委員会  
平安・鎌倉時代の掘立柱建物跡・土壇・柱穴等が検出された。  
遺物は、瓦器・土師器のほか、白磁碗や緑釉の杯・壺、銭貨等が  
出土している。
- 西ノ岡遺跡第 2 次 向日市教育委員会  
縄文時代晩期の土壇が 1 基検出された。その他、時期不明のピ  
ット群や溝も検出されている。
- 鳥居前古墳第 2 次 大山崎町教育委員会  
くびれ部とそれに続く前方部の葺石が検出された。今回の調査  
によって、この古墳の墳形が帆立貝式であったことが判明した。  
(山口 博)

## センターの動向 (61.6~8)

## 1. できごと

6. 2 瓦谷遺跡(木津町)発掘調査開始
6. 3 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(大阪市)出席(荒木事務局長・安達主事)
6. 4 ゲンギョウの山古墳群(弥栄町)発掘調査開始
6. 9 篠掛ヶ谷1号窯跡(亀岡市)発掘調査終了 4.24~
- 6.12 正垣遺跡(大宮町)発掘調査現地説明会実施
- 6.13 長岡京跡第172次(向日市)発掘調査関係者説明会実施  
長岡京跡左京第151次(向日市)発掘調査関係者説明会(1)実施
- 6.16 退職職員辞令交付式(別掲)
- 6.17 人事異動発令(別掲)
- 6.24 長岡宮跡第172次発掘調査終了  
4.17~
- 6.25 昭和60年度会計監査
- 6.26 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(大津市)出席(荒木事務局長・中西総務課長・中西囑託)
- 6.27 第16回役員会・理事会一於：パレスサイドホテルー福山敏男理事長, 佐原真, 足利健亮, 原口正三, 藤田价浩, 小嶋一夫, 堤圭三郎の各理事, 荒木昭太郎常務理事出席
7. 1 新規採用職員辞令交付(別掲)
7. 2 栗ヶ丘古墳群(綾部市)発掘調査開始
- 長岡京連絡協議会開催
7. 2~5 新規採用職員研修実施
7. 3 正垣遺跡発掘調査終了 4.14~
7. 7 西平川城館跡(田辺町)踏査開始 南  
稲八妻城跡(精華町)発掘調査開始
- 7.10 尊勝寺跡(京都市)発掘調査開始
- 7.12 宮の森古墳群(弥栄町)発掘調査現地説明会実施  
西平川城館跡踏査終了
- 7.19 第35回研修会開催(別掲)
- 7.22 宮の森古墳群発掘調査終了 4.24~
- 7.24 長岡京跡左京第151次発掘調査関係者説明会(2)実施
- 7.26 芝山遺跡(城陽市)発掘調査現地説明会実施
- 7.30 長岡京連絡協議会開催
8. 4 古殿遺跡(峰山町)発掘調査開始
- 8.11 上中遺跡(京北町)発掘調査開始
- 8.17~30 第5回「小さな展覧会」開催  
(別掲)
- 8.19 第36回研修会開催(別掲)
- 8.20 長岡京跡左京第151次発掘調査関係者説明会(3)実施  
長岡京跡左京第151次発掘調査終了  
4.30~
- 8.21 臨時役員会一於：当調査研究センター研修室ー福山敏男理事長, 樋口隆康副理事長, 川上 貢, 足利健亮, 原口正三, 堤圭三郎の各理事, 荒木昭太郎常務理事出席

- 8.25 八ヶ坪遺跡(木津町)発掘調査開始
- 8.27 長岡京連絡協議会開催
- 8.28 木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査関係者説明会実施

## 2. 普及啓発事業

- 6.30 『京都府埋蔵文化財情報』第20号刊行
- 7.19 第35回研修会開催一於：宇治市中央公民館一石井清司「田辺町郷土塚4号墳・畑山2・3号墳について」、鷹野一太郎「田辺町大住南塚古墳について」、近藤義行「城陽市久津川古墳群の調査」、荒川 史「宇治市隼上り古墳群について」、杉本 宏「宇治市二子塚古墳とその周辺の遺跡」
- 8.17～30 第5回「小さな展覧会」開催一於：向日市文化資料館
- 8.19 第36回研修会開催一於：向日市市民会館一肥後弘幸「舞鶴市志高遺跡の遺構・遺物について」、石尾政信「長岡宮跡第164次調査出土の緑釉唾壺」、戸原和人「木津町中ノ島遺跡出土の軒瓦について」

## 3. 人事異動

- 6.16 白塚 弘総務課長，退職  
長谷川達主任調査員，退職
- 6.17 堤圭三郎調査課長，退職〔京都府教育委員会に復職(文化財保護課長)〕  
中谷雅治，京都府教育委員会から派遣される(調査課長)

中西和之，京都府教育委員会から派遣される(総務課長)

長谷川達主任調査員，京都府教育委員会職員に採用される

小山雅人調査員，主任調査員に昇任

- 7.1 伊賀高弘調査員，採用

受贈図書一覧 (61.5.12~7.19)

秋田県埋蔵文化財センター	カウヤ遺跡第2次発掘調査報告書, 蝦夷塚古墳群発掘調査報告書, 上の山Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書, 石名館遺跡第2次発掘調査報告書, 払田柵跡 第60~64次調査概要, 遺跡詳細分布調査報告書, 秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第1号, 秋田県埋蔵文化財センター年報 4
(財)福島県文化センター	福島県文化財調査報告書 第160~166・170集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	下佐野遺跡Ⅱ地区, 清里・長久保遺跡
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	年報 1~4
(財)山武郡南部地区文化財センター	(財)山武郡南部地区文化財センター年報 №1, (財)山武郡南部地区文化財センター発掘調査報告書 第1・2集
山梨県埋蔵文化財センター	山梨県北巨摩郡高根町八ヶ岳東南麓遺跡分布調査報告書, 一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜井場遺跡・笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書
(財)長野県埋蔵文化財センター	長野県埋蔵文化財センター年報 2
(財)愛知県埋蔵文化財センター	(財)愛知県埋蔵文化財センター 年報 昭和60年度
(財)滋賀県文化財保護協会	伊吹町文化財調査報告書1 弥高寺 調査概報, 坂田郡山東町 遺跡詳細分布調査報告書, 県道大津能登川長浜線交通安全施設工事関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ, 昭和59年度 滋賀県文化財調査年報, 県道高野・守山線特殊改良工事に伴う高野遺跡発掘調査報告書, 国道161号線バイパス関連遺跡調査概要(昭和60年度)高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要一針江北遺跡一, 県道中主~野洲線工事に伴う遺跡発掘調査報告書, 草津川橋梁部埋蔵文化財試掘調査概要報告書, 湖岸堤管理用道路下笠その2工区建設に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書
(財)大阪府埋蔵文化財協会 和泉丘陵内遺跡調査会 奈良国立文化財研究所	泉州の遺跡, 阪南町内埋蔵文化財一分布調査報告書一 和泉丘陵内遺跡発掘調査概要V 奈良国立文化財研究所年報 1985, 昭和60年度 平城宮跡調査部発掘調査概報, 平城京跡左京九条三坊十坪発掘調査報告
(財)元興寺文化財研究所	出土木製遺物の実態調査報告書 近畿・中国地方, 北海道・東北・関東, 近畿・中部地方, 関東・東北・北海道地方, 近畿・中国・四国・九州, 北海道・東北・関東・中部地方
(財)鳥取県教育文化財団	佐川遺跡群・下山南通遺跡



(財)広島県埋蔵文化財調査センター	三良坂町の原始・古代と岡田山第3号古墳発掘調査の記録
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒町遺跡 一第33次発掘調査概要一, 草戸千軒 調査研究ニュース 第13巻№142~153
網走市教育委員会	喜多山遺跡
八戸市教育委員会	史跡根城跡発掘調査報告書Ⅶ
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財保護行政年報, 栃木県立博物館 研究紀要第1・2号, 開館記念 栃木の名宝展, 第3回企画展「下野の職人展」, 第7回企画展「はなひらく縄文文化」, 第13回企画展 足利氏の歴史一尊氏を生んだ世界一
東京都教育委員会	八丈町 倉輪遺跡 東京都埋蔵文化財調査報告第13集
新島本村教育委員会	東京都新島本村式根島吹之江遺跡
八丈町教育委員会	八丈島 倉輪遺跡
神奈川県教育委員会	神奈川県埋蔵文化財調査報告28
茅ヶ崎市教育委員会	茅ヶ崎市文化財資料集第10集
富山県教育委員会	昭和60年度 富山県埋蔵文化財調査一覽, 小杉丸山遺跡 隣接地区発掘調査概要, 小杉丸山遺跡, №18 遺跡 B地区 №19遺跡, 南太閤山 I 遺跡
婦中町教育委員会	婦中町埋蔵文化財調査報告 第4・6冊, 新町Ⅱ遺跡の調査
加賀市教育委員会	三木だいもん遺跡, 勅使館跡
武生市教育委員会	高森遺跡 I
韮崎市教育委員会	金山遺跡 下木戸遺跡 中道遺跡
長野市教育委員会	浅川扇状地遺跡群
菊川町教育委員会	千駄ヶ原遺跡群 1 地点, 耳川遺跡Ⅱ, 豆尻遺跡
常滑市教育委員会	常滑市民俗資料館 研究紀要Ⅱ
豊田市教育委員会	豊田市郷土資料館報告23
滋賀県教育委員会	滋賀県中世城郭分布調査 4, 昭和五十九年度 滋賀県文化財 調査年報
大津市教育委員会	近江国府関連遺跡発掘調査報告書一菅池遺跡一
山東町教育委員会	坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書
大阪府教育委員会	1985年度 大阪府立泉北考古資料館の概要
柏原市教育委員会	高井田遺跡 1, 大県南遺跡, 大県・大県南遺跡, 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1985年度
吹田市教育委員会	昭和59年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報, 昭和60年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報
高槻市教育委員会	高槻市文化財調査概要報告 X

富田林市教育委員会	中野遺跡・宮林古墳発掘調査概要，喜志西遺跡発掘調査概要，中野遺跡発掘調査概要Ⅴ，獄山遺跡発掘調査報告書—富田林市龍泉所在—，中野遺跡発掘調査概要Ⅲ
松原市教育委員会	松原市遺跡発掘調査概要 昭和60年度
八尾市教育委員会	八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書
美原町教育委員会	河内鋳物師とその作品
兵庫県教育委員会	兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度，明石城跡Ⅱ，相生市・緑ヶ丘窯址群・上板井古墳群
姫路市教育委員会	史跡播磨国分寺保存管理計画策定報告書，本町遺跡
加西市教育委員会	ヤクチ古墳群
奈良県企画部	第1回 奈良国際シンポジウム「文化遺産の保存と都市づくりとの調和」
天理市教育委員会	天理市埋蔵文化財調査概報(1986)
榛原町教育委員会	奈良県宇陀郡榛原町下城・馬場遺跡，奈良県宇陀郡榛原町丹切遺跡発掘調査概要
御坊市教育委員会	昭和57年度 岩内1号墳環境整備報告書
米子市教育委員会	池ノ内遺跡，目久美遺跡
日南町教育委員会	内ノ倉山横穴群発掘調査報告書
奈義町教育委員会	山伏塚遺跡，野田遺跡
下関市教育委員会	吉母浜遺跡，綾羅木郷遺跡，垢田舟原 柏原遺跡
久留米市教育委員会	久留米市埋蔵文化財集報(Ⅰ)，東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書 第5集，上津土壘跡
大分県教育委員会	ふいが城遺跡，九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報—日田地区一，中津市加来地区遺跡群，上ノ原遺跡群，屋宗横穴墓，昭和60年度大分県内遺跡詳細分布調査概報5
宮崎市教育委員会	宮崎の古墳文化，蓮ヶ池横穴群保存整備事業概報Ⅰ，吉村第二土地改良区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
相知町教育委員会	相知町文化財調査報告書第1集
野尻町教育委員会	新村遺跡 高山遺跡
八戸市博物館	八戸市博物館 研究紀要 第2号
秋田県立博物館	秋田県立博物館研究報告 第11号
須賀川市立博物館	首藤保之助(阿武隈考古館)考古資料採集記録(第2号)
日立市郷土博物館	日立市郷土博物館展示あんない 開館10周年記念出版，日立市郷土博物館収蔵資料目録 第5集 考古資料1，日立市郷土博物館 紀要 第6号

栃木県立博物館	ほりだされた下野の古代, 栃木県立博物館 年報 昭和59年度(第3号)
埼玉県立歴史資料館	板石塔婆一石の証人たち一, 研究紀要 第8号
埼玉県立さきたま資料館	瓦塚古墳, 資料館報 No.16
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告第8集
市立市川考古博物館	下野国分尼寺跡Ⅳ 昭和60年度調査報告, 昭和59年度 市立市川考古博物館年報
成田靈光館	成田靈光館報 なりた No.36, 浮世絵 成田靈光館図録第4集
東京都世田谷区立郷土資料館	浄真寺 文化財総合調査報告
大田区立郷土博物館	時を知るこよみと和時計
(財)五島美術館	甦るインドシナ半島のやきもの
神奈川県立博物館	神奈川県立博物館発掘調査報告書 第15号・第16号
魚津市歴史民俗資料館	富山県魚津市本江地内埋蔵文化財発掘調査報告書
小松市立博物館	所蔵品目録 Ⅲ
福井県立朝倉氏遺跡資料館	朝倉氏遺跡資料館紀要 1985, 特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡XⅦ, 武者野遺跡
名古屋市博物館	研究紀要 第9巻
瀬戸市歴史民俗資料館	愛知工業大学グラウンド造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 一曳山の館一
水口町立歴史資料館	
柏原市歴史資料館	柏原市埋蔵文化財 発掘調査概報 1985年度, 明神山系 遺跡分布調査概報Ⅱ 1985年度, 大県・大県南遺跡, 鳥坂寺一寺域の調査一, 高井田横穴群
鳥取県立博物館	鳥取県立博物館研究報告 第22号, 郷土と博物館 第31巻 第1号・第2号
倉敷考古館	倉敷考古館研究集報 第19号
佐賀県立九州陶磁文化館	佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要第1号
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	鶴見古墳, 宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報, 宇佐宮弥勒寺
東北学院大学文経法学会	東北学院大学論集創立百周年記念 歴史・地理学第16号
宇都宮大学考古学研究会	峰考古 第6号
國學院大學考古學資料館	國學院大學考古學資料館紀要 第2輯
國學院大學文学部考古學研究室	北堂C遺跡・明神堂遺跡, 物見処遺跡1986
国際基督教大学考古学研究センター	向ノ原遺跡
東京工業大学製鉄史研究会	日本前近代製鉄の東西比較研究, 古代日本の鉄と社会
東洋大学文学部史学科研究室	東洋大学文学部紀要 第39集, 白山史学 第22号
早稲田大学図書館	古代 第80号

早稲田大学考古学会	古代 第81号
富山大学人文学部考古学研究室	立山町埋蔵文化財分布調査報告 1 1985年度
名古屋大学文学部考古学研究室	名古屋大学文学部研究論集XCV 史学32(考古学抜刷第1集), 考古資料ソフテックス写真集 第1集
天理大学附属天理参考館	教祖百年祭記念 天理大学附属天理参考館図録
大阪大学文学部国史研究室	竪穴式石室の地域性の研究
神戸女子大学史学会	神女大史学 第4号
岡山大学埋蔵文化財調査室	岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ
広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会	広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅴ
山口大学埋蔵文化財資料館	山口大学構内遺跡調査研究年報 Ⅱ～Ⅳ
別府大学付属博物館	別府大学付属博物館展示資料図録 1986
鹿児島大学埋蔵文化財調査室	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 Ⅰ
東北新幹線赤羽地区遺跡調査会	東北新幹線建設工事に伴う遺跡発掘調査概要 赤羽台・袋低地・船渡袋西浦一東京都北区袋西浦遺跡発掘調査報告一
赤羽北二丁目第2団地遺跡調査会	
調布市深大寺町上野原遺跡調査会	上野原遺跡
都立府中病院内遺跡調査会	武蔵国分寺遺跡発掘調査報告書, 武蔵台遺跡Ⅰ
玉川文化財研究所	東京都稲城市寺谷津遺跡群発掘調査報告書, 横浜市戸塚区竹鼻遺跡発掘調査報告書, 横浜市緑区東方横穴墓群第2次調査発掘報告書, 横浜市磯子区峯遺跡群発掘調査報告書
埋蔵文化財研究会第19回研究集会事務局	海の生産用具一弥生時代から平安時代まで一 発表要旨資料集1～3, 同追加資料
郵政考古学会	郵政考古紀要 11
御坊市遺跡調査会	尾ノ崎遺跡環境整備報告書, 小松原Ⅱ遺跡(湯川氏館跡)発掘調査概報Ⅳ, 広域営農用地農道整備事業に伴う岩内Ⅱ遺跡発掘調査概報, 広域営農用地農道整備事業に伴う岩内古墳群他埋蔵文化財確認調査概報, 昭和59年度 富安Ⅰ遺跡他発掘調査概報, 昭和60年度 御坊市内遺跡発掘調査概報
(財)古代学協会	古代文化 第38巻 第7号
ヨシダ印刷	春獄公記念文庫名品図録
釜山大学校博物館	釜山大学校博物館遺蹟調査報告 第8輯, 同 第9輯
京都府教育委員会	埋蔵文化財発掘調査概報(1986)
京都市文化観光局	京都市遺跡地図台帳
向日市教育委員会	向日市埋蔵文化財調査報告書 第3・5・6・18集

長岡京市教育委員会  
宇治市教育委員会

城陽市教育委員会  
久御山町教育委員会  
田辺町教育委員会  
山城町教育委員会  
加茂町役場

福知山市教育委員会  
宮津市教育委員会  
岩滝町教育委員会  
加悦町教育委員会  
網野町教育委員会

京都府立総合資料館  
京都府立山城郷土資料館  
京都市歴史資料館  
向日市文化資料館  
橘女子大学図書館  
(財)京都府文化財保護基金

麻生 優  
井上 定清

高橋 美久二  
田中 弘清  
辻尾 栄一

長関 和男・辻本 和美  
中村 信幸  
原口 正三  
樋口 隆康  
福山 敏男

吉本 昌弘

寂照院総合調査報告書

宇治市街遺跡第2次発掘調査概報, 大鳳寺跡第6次発掘調査概報,  
宇治の美術工芸, 宇治市遺跡地図(改訂版)

城陽市埋蔵文化財調査報告書 第14・15集

久御山町史第1巻

大住南塚古墳発掘調査概報

史跡高麗寺跡第2次範囲確認調査概報

年表 加茂町の歴史と文化

福知山城跡

みやつの文化財第二集—歴史と文化財—

京都府岩滝町文化財調査報告 第8集

中上司史跡Ⅱ

網野町の遺跡

資料館紀要 第14号

企画展 燈明寺の文化財

京都市歴史資料館紀要 第3号

向日市文化資料館研究紀要創刊号

橘女子大学研究紀要 第12号

京都の美術工芸 京都市内編 上・下

日本考古学における層位論の基礎的研究

真福寺遺跡, 大県南遺跡, 高井田遺跡1, 大坂城惣構・西町奉行所  
跡発掘調査概要, 高井田横穴群Ⅰ, 烏坂寺一寺域の調査—

図説発掘が語る日本史5

史跡松花堂およびその跡 整備事業報告書

箕面の歴史年表

中國文物圖説 國立故宮博物院手冊

半田市立博物館 展示解説

埋蔵文化財と考古学

シルクロード考古学 第2巻・第3巻

古代の日本と朝鮮, 大工道具の歴史, 比叡山と天台の美術, 中華人民  
共和国出土文物展, ギリシャ美術の源流, 北九州市立美術館開館  
記念中華人民共和国漢唐壁画展, 木津町埋蔵文化財調査報告書第1  
集, 特別展 日本の陶磁, 奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館案内,  
季刊 明日香風 第4・19号, アサヒグラフ 通巻3,092号, 遷都1200  
年 長岡京, 日本古典文学大系 日本書紀 下

歴史と神戸 第24巻 第1・2・6号

—編集後記—

暑い夏が終わり、ようやく涼しくなりました。情報21号ができましたので、お届けします。

今回も投稿原稿が2本あり、充実した内容になりました。安田章氏の「宮谷横穴状遺構について」は、いわゆる横穴墓ではなく、鎌倉などでみられる「やぐら」のような中世墳墓であったことを述べた力作です。また、梶本敏三氏も城陽市内の青谷石神古墳群をとりあげておられます。このほか、篠窯跡群でみつかったヘラ描き文字・文様の須恵器についても一文が草されています。よろしく御味読下さい。

(編集担当=土橋 誠)

## 京都府埋蔵文化財情報 第21号

昭和61年9月30日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
☎ (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
☎ (075)441-3155 (代)